

佐賀大学国際交流推進センター 平成25年度年報

Annual Reports of Center for Promotion of International Exchange
Saga University 2013-2014



佐賀大学

ANNUAL REPORTS

挨拶

国際交流推進センター長
研究・国際・社会貢献担当理事／副学長

中 島 晃



佐賀大学はアジアを中心に地域社会とともに国際化を推進するという目標を掲げ、これまでに多くの留学生を受け入れ、また、海外の研究者との学術交流を活発に行って参りました。平成23年1月に6つの基本構想と7つの戦略から成る“佐賀大学国際戦略構想”を策定し、国際交流を戦略的に展開するために、既設の留学生センターを改組し、平成23年10月1日に佐賀大学国際交流推進センターを新たに設置致しました。その目的は、国際交流を大学として組織的に支援するとともに、これまで実践してきた留学生に対する国際教育プログラムの拡充、研究者の受入れのさらなる推進や本学の学生・研究者の海外派遣の拡大など、国際交流の新しい潮流を創り出し、大学の国際化の進展に寄与することにあります。

本センターの設置後2年目となる平成25年度の新たな取り組みは、佐賀大学サマープログラムおよび佐賀大学・香港中文大学サマーキャンプという二つのサマープログラムの立ち上げです。協定校から派遣された参加学生が本学の特色ある研究や教育に触れ、地域コミュニティや佐賀大学生との交流を通して、多くのことを学び豊かな体験を得ることで、協定大学と本学との交流が促進し連携がさらに強化されると考えています。本学学生にとっても、優秀な海外の学生と共に学び、考える機会が提供できることは大変意義のあるものと思います。さらに、これらのプログラムを実施する中で、学内関係者のみならず県内の行政機関や国際交流団体などと連携する機会も非常に増えております。今後、本国際交流推進センターが、佐賀大学の国際化の進展に大きく貢献することはもとより、地域の国際交流の拡充の推進役として機能することを念願しています。

平成27年10月31日

目 次

挨拶	1
I. 国際交流企画推進室	3
1. 学術交流協定	3
2. 学部・研究科等の留学生受入れ・国際教育にかかわる支援	3
3. 広報活動の強化	4
4. 国際交流セミナーの開催	5
5. 佐賀大学友好特使の委嘱と活動	7
6. 佐賀大学ハノイ・サテライトの活動	8
7. 重要な地域との交流課題	8
II. 学生交流部門	9
1. 留学生受入れの傾向	9
2. 交換留学生プログラム	
2.1 佐賀大学短期交換留学プログラム（SPACE）の改革	9
2.2 SPACE-E 実施報告	10
2.3 SPACE-J 実施報告	13
3. 日本語・日本文化研修コース実施報告	16
4. サマープログラム	17
5. 留学生支援	19
6. キャンパスの国際化	
6.1 グローバルリーダーズ	19
7. 学生の海外派遣	
7.1 交換留学生の派遣	20
7.2 SUSAP（Saga University Study Abroad Program）の実施	21
8. 学生の海外派遣支援経費（国際化支援制度）	28
III. 学術研究交流部門	
1. 研究者海外派遣の支援	34
IV. 地域国際連携室	
1. 平成25年度産学官国際交流セミナー	38
2. 留学生対象就職支援講演会	40
資料	41

I. 国際交流企画推進室

1. 学術交流協定

1.1 国際交流推進センターが先導する大学間交換交流協定

平成25年度は新たに3大学との研究および学生交流を開始することになった。リトアニアのヴィタウタス・マグヌス大学およびフィンランドのユバスキュラ大学は活発な学生交流が期待できる大学として学生交流の覚書も含める学術交流協定を締結した。締結直後から両大学への学生派遣および受入が開始され、活発な学生交流がきている。ジャカルタ国立大学は本学の工学系研究科において博士号を取得したOBが教鞭をとり、研究および学生交流が期待できるとして学術交流協定の締結に至った。

本学は学部・研究科における研究交流を主体とした学術交流協定を締結してきた。学生のモビリティを高めることを念頭においた協定校の拡大と協定締結を実現するなど、戦略的に国際交流を推進する必要性を認めた大学間交流協定を国際交流推進センターが先導することを決定した。

本年度は以下の大学間交流協定を締結・更新した。

【新規】

- (1) ヴィタウタス・マグヌス大学（リトアニア）・国立大学・H25年8月26日締結
大学間学術交流協定及び学生交流覚書の締結
- (2) ユバスキュラ大学（フィンランド）・国立大学・H25年11月8日締結
大学間学術交流協定及び学生交覚書の締結
- (3) ジャカルタ国立大学（インドネシア）・国立大学・H26年2月11日締結
大学間学術交流協定の締結

1.2 協定校との交流状況の実態調査

現在の協定校との交流状況の把握及びその対応、さらには重点大学の選定等への積極的な活用に役立てるため実態調査を行った。調査の結果、休眠状況にある協定校は少なく、大多数の協定校との交流が継続的に実施されていることが判明した。

2. 学部・研究科等の留学生受け入れ・国際教育にかかわる支援

2.1 2014年度大学推薦による国費外国人留学生（研究留学生）の推薦

2014年度大学推薦による国費外国人留学生（研究留学生）【文部科学省】に14人を推薦した。（うち1人は辞退）

	氏名	国籍	研究科	課程
1	HAQUE REHNUMA	バングラデシュ	鹿児島大学大学院連合農学研究科	博士
2	AL MAHMUD MUHAMMAD	バングラデシュ	教育学研究科	修士
3	KETSIN THANAWAT	タイ	経済学研究科	修士
4	WANG CHONG	中国	医学系研究科	博士

5	RAHMAN MD MOSTAQR	バングラデシュ	工学系研究科	博士
6	JUNCHAY DONNAPAT	タイ	経済学研究科	修士
7	RASHID RIMI	バングラデシュ	工学系研究科	博士
8	ELSAYED AYMAN KHAMIS	エジプト	鹿児島大学大学院連合農学研究科	博士
9	ALI MD HASAN	バングラデシュ	工学系研究科	博士
10	NGUYEN MY HOA THI	ベトナム	農学研究科	修士
11	FERDOUSE JANNATUL	バングラデシュ	農学研究科	研究生
12	SARKAR MD ABDUR RAUF	バングラデシュ	農学研究科	修士
13	KHATUN HAFIZA	バングラデシュ	農学研究科	修士

2.2 ABE イニシアティブに登録決定

平成25年11月に農学研究科と工学系研究科の登録が決定した。ABE イニシアティブはアフリカの学生の産業人材育成を目的に、修士課程教育と企業インターンシップを行う JICA の教育支援プログラムである。平成26年度に学生選考が開始される予定である。

2.3 ISAC 運営委員会への協力

全学教育機構に設置された英語プログラム ISAC（代表・諸泉副機構長、プログラム担当責任者・早瀬教授）を支援するため、全学教育機構からの要請により、来年度予定される「ISAC 運営委員会（仮称）」の設置について、構成員として国際交流推進センターから参加することを決定した。

2.4 工学系研究科特別配置プログラムへの協力

文部科学省の平成25年度「国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラム」の選考の結果、本学工学系研究科の環境・エネルギー科学グローバル教育プログラム（代表・石橋工学系研究科長、プログラム責任者・村松教授）が採択された。本プログラムは本学が行う重点的英語プログラムであることから、その実施に際してセンターは適切な支援策を今後検討することとした。

3. 広報活動の強化

3.1 国際交流記事の佐賀大学ホームページへの掲載

佐賀大学のホームページが改定されることになり、国際交流に関する記事をホームページに掲載することにより、センターの広報機能の強化を図ることとした。それまでの本学ウェブサイトのトップページに「国際交流」を示すアイコンが設定されておらず、学内外の関係者および本学に関心を持つ方々にとって学术交流や留学生受入、学生の派遣等にかかわる情報の入り口が不明瞭であった。以下の項目案を提案し、佐賀大学ホームページの改定に反映した。

3.2 センターニュースレターの発行

センターの学内広報活動として、主要な国際交流活動を網羅するニュースレターを適宜発行することを開始した。ニュースレターの原案は、各室・部門長の協力を得て国際交流企画推進室において企画・作成し、企画推進

室長と副センター長が共同して編集する。

ニューズレター No.1 2014年1月号	国際交流推進センター 							
佐賀大学国際交流ニュース	他機関の国際交流情報							
<p>□ 工学系研究科川喜田英孝准教授は、2013年4月より1年間の予定でカリフォルニア州立大学にて研修中です。派遣に対する国際交流推進センターからの支援として、川喜田准教授は「平成25年度佐賀大学研究者海外派遣事業」（平成24年度に開始した研究者支援事業。詳細は国際交流推進センターのホームページをご覧ください。）に採択されました。</p> <p>□ 学術交流協定校である台湾の元培科技大学より、TSAI(蔡)YAI Hsien 理事（台湾健康管理学会理事長）、他教員10名、学生11名が1月14日に来学し、中島理事、渡辺農学部長、佐藤保健管理センター長及び国際交流推進センター教員と交流及び意見交換をしました。</p> <p>□ 経済学部と長年交流を行っているタイ、ニュージーランド、スリランカ及びブータンから4名（下記参照）の研究者が1月15日国際交流推進センターを訪問し、今後の学生及び研究交流の発展について意見交換を行いました。</p> <p>□ Prof. Saliya De Silva（スリランカ、Senior Lecturer, Head of the Dept. of Agricultural Extension, University of Peradeniya, 佐賀大学卒業生）、Prof. Chollada Luangpituxa（タイ、Associate Professor, Vice Dean, Faculty of Economics, Kasetsart University、研究交流・学生交流キーパーソン）、Prof. Ken Jackson（ニュージーランド、Resarch Professor, Resarch Associate and Former Director, Center for Development Studies, Auckland University）の3氏は、スリランカ、タイ、ニュージーランドを代表する経済分野のコンタクトパーソンとして、1月15日中島理事より佐賀大学友好特使が委嘱されました。人物紹介の欄の写真と下記のコラムをご覧ください。</p> <p>佐賀大学友好特使とは？</p> <p>2013年より佐賀大学の国際交流活動にご支援・ご協力をしてくださるかたに対して「友好特使」を委嘱しています。佐賀大学の卒業生で帰国後大学や政府機関で働く人などで、同窓会の世話役や現地でコンタクトパーソンとして貢献してくれる方です。候補者を求めています。メールで国際課へご推薦ください。</p> <p>編集：国際交流推進センター・副センター長&交流企画室長</p>	<p>★佐賀県国際戦略本部では、留学生の受け入れ拡大の取り組みなどを含む、次期佐賀県国際戦略の策定を開始しました。国際戦略の策定とその実施について佐賀大学・国際交流推進センターへ協力の依頼がありました。</p> <p>★文部科学省の「留学生交流拠点整備事業」（平成27年度）が公募されます。国際交流推進センターでは平成27年度の応募を目指して準備を開始しました。この事業では地元自治体等の協力が不可欠であるため、佐賀県へ準備と実績作りの協力を依頼しました。</p> <p>★入学前海外研修を国立大学として東北大学が初めて開始します。平成26年度AO入試II期・推薦入試等により入学が決まった高校生を対象にするもので、参加者はカリフォルニア大学リバーサイド校の2週間のプログラムに参加し、英語での授業を受講することで語学学習への意欲を高め、ホームステイなどを通じて異文化理解を促進する予定です。</p>	<p>人物紹介</p> <table border="1"> <tr> <td data-bbox="917 929 1157 1019"> <p>（新任）ナルモン先生 Naramol Vongthanasunthorn 工学系研究科都市工学専攻准教授</p> </td> <td data-bbox="1165 929 1404 1019"> <p>（友好特使）前列中島理事を挟み左よりタイ、ニュージーランド、スリランカの友好特使</p> </td> </tr> <tr> <td data-bbox="917 1019 1157 1108"> <p>タイから参りました。日本国内及び途上国の総合水管理に関する研究をしています。</p> </td> <td data-bbox="1165 1019 1404 1209">  </td> </tr> <tr> <td data-bbox="917 1108 1157 1209">  </td> <td></td> </tr> </table>	<p>（新任）ナルモン先生 Naramol Vongthanasunthorn 工学系研究科都市工学専攻准教授</p>	<p>（友好特使）前列中島理事を挟み左よりタイ、ニュージーランド、スリランカの友好特使</p>	<p>タイから参りました。日本国内及び途上国の総合水管理に関する研究をしています。</p>			
<p>（新任）ナルモン先生 Naramol Vongthanasunthorn 工学系研究科都市工学専攻准教授</p>	<p>（友好特使）前列中島理事を挟み左よりタイ、ニュージーランド、スリランカの友好特使</p>							
<p>タイから参りました。日本国内及び途上国の総合水管理に関する研究をしています。</p>								
								

4. 国際交流セミナーの開催

佐賀大学の国際交流を強化するためには、大学の枠組みや発想を超えた取り組みも今後必要であることから、文部科学省以外の視点から国際交流を展望する手掛かりを得るため、3月31日に国際交流を本務としている代表的な国際機関・ハビタットと国内機関・JICA から2人の講師を招き、懇談会を行った。国際交流業務の豊富な経験をお持ちの国際連合人間居住計画（ハビタット）福岡本部長補佐官・星野幸代氏、独立行政法人国際協力機構九州国際センター所長・勝田幸秀氏から、大学における国際交流の展望について話題提供がなされ、引き続き国際交流推進センターの教員、兼任教員及び国際課職員と今後の佐賀大学が行うべき国際交流の拡充の方向性について意見交換を行った。

「国際機関等と大学との連携による国際交流」

日時：2014年3月31日 14時40分～16時20分

場所：図書館会議室

講演1

「国連ハビタットの活動と大学・教育機関との連携について」

国際連合人間居住計画（ハビタット）福岡本部（アジア太平洋担当）

本部長補佐官 星野 幸代 氏

1. 国連とは？
 - (1) 国連ハビタットが実施したアジア地域における主な戦争・自然災害復興事業
 - (2) 国連ハビタットの仕事：すべての人に適切な住まいを提供する
2. 国連ハビタットと日本の環境技術
 - (1) 九州の企業や自治体の技術・ノウハウの移転によってアジア都市に共通する環境課題を解決する
 - (2) Academic Activities by UN-HABITAT ROAP
3. 地元教育機関と国連ハビタットの連携
 - (1) 九州大学大学院
 - 人間環境学研究院：ハビタット GP プログラム
 - 東アジア研究機構：アジア・デザイン・キャンプ
 - (2) 西南学院大学
 - 学生ボランティアサークル
 - (3) 福岡大学大学院 福岡方式廃棄物埋め立て処分技術移転
 - (4) 地元教育機関と国連ハビタットの連携 出前講義、ゲストスピーカー等
4. 大学生がスリランカで見た国際協力
福岡県「国際協力リーダー育成プログラム」に参加して感じたこと・考えたこと

講演 2

「JICA 事業における大学との連携」

独立行政法人国際協力機構 JICA 九州センター所長 勝田 幸秀 氏

- 1 JICA について
 - (1) ODA とは (2) JICA について (3) JICA 九州について
- 2 JICA と大学との連携
 - (1) JICA が計画し大学の協力を得る事業
 - ・ 技術協力
 - 技術協力プロジェクト、研修員受入、専門家派遣、調査団派遣
 - ・ 有償資金協力 - 留学生借款
 - ・ 無償資金協力 - 人材育成支援無償
 - (2) 大学から提案頂く事業
 - ・ 地球規模課題に対応する科学技術協力
 - 地球規模課題対応国際科学技術協力 (SATREPS)
 - 科学技術研究員派遣
 - ・ 草の根技術協力 草の根協力支援型、草の根パートナー型、地域提案型
 - (3) その他
 - ・ 連携協定
 - ・ 携援助人材育成・国民参加促進 大学生フィールドスタディプログラム、インターンシップ、連携講座
 - ・ 調査研究 - 共同研究

5. 佐賀大学友好特使の委嘱と活動

佐賀大学の帰国留学生等を佐賀大学友好特使として委嘱し、友好特使を通じて留学情報、研究情報等を発信・収集し、留学生交流及び国際学術交流を図ることにより、本学の国際化を推進することを目的し、平成25年2月28日に「佐賀大学友好特使に関する要項」を制定した。それをうけて、本年度は新たに12人に友好特使を委嘱した。

番号	国名	名前	所属・職名	その他
1	中国	葛 堅	浙江大学 建築工程学院 教授	元佐賀大学教員
2	中国	石 堅忍	浙江工商大学 准教授	佐賀大学卒業生
3	中国	欧阳 金龙	四川大学 建築・環境学部 准教授	佐賀大学卒業生
4	中国	官 冬杰	重慶交通大学 教授	元佐賀大学非常勤研究員
5	中国	应 小宇	浙江大学城市学院 准教授	佐賀大学卒業生
6	中国	王 纯彬	浙江工商大学 准教授	佐賀大学卒業生
7	中国	祁 巍鋒	浙江大学 建築工程学院 講師	佐賀大学卒業生
8	日本	副島 善文	日本たばこ香港取締役会長、香港佐賀県人会会長	香港中文大学プログラムキーパーソン
9	スリランカ	Saliya de Silva	Senior Lecturer, Head of the Dept. of Agricultural Extension, Faculty of Agriculture, University of Peradeniya	佐賀大学卒業生
10	タイ	Chollada Luangpituksa	Associate Professore, Vice Dean, Faculty of Economics, Kasetsart University	研究交流・学生交流キーパーソン
11	ニュージーランド	Ken Jackson	Research Professor, AIS St Helens; Research Associate and Former Director, Center for Development Studies, Auckland University	研究交流・学生交流キーパーソン
12	日本	江頭 利将	セイカン総合エンジニアリング 最高執行責任者 (COO) 上海佐賀県人会幹事長	中国関係キーパーソン

平成25年度の友好特使にご協力いただいた活動として、3月15日に上海で開催した「佐賀大学・上海セミナー」がある。佐賀県大町町出身で上海佐賀県人会幹事長を務めておられる江頭利将氏による本学学生向けのセミナーを開催した。中国浙江省杭州市の協定校の短期研修に参加する本学学生と当時中国の大学に交換留学中であった学生等15人に対して講義をしていただいた。海外で学び仕事をする醍醐味、難しさ、また日本人として海外で活動する前に身につけておく知識や心構え等について、躍動する上海経済を肌で感じつつ学ぶ貴重な機会を提供していただいた。



江頭氏による講義



セミナー終了後の記念撮影

6. 佐賀大学ハノイ・サテライトの活動

平成21年9月に設置したサテライトオフィスは4年目を迎えた。多くの日本の大学や機関の関係者が立ち寄り、情報収集の場として活用していることは評価できるが、本学がオフィスを基点として研究や教育活動のために十分な活用をしているとは言えない。ツイニング・プログラムや交換留学プログラムの紹介、入試、手続きなどの対応については、本学大学院を修了した同窓生がオフィス担当として常駐しており、丁寧できめこまやかな情報提供と支援サービスができています。今後は、サテライト機能の再検討と学内教員による積極的な活用を促進するための周知に取り組む必要がある。

7. 重要な地域との交流課題

7.1 ハノイ・サテライトの継続

文化教育学部がベトナム国家大学ハノイ外国語大学の学部と実施しているツイニング・プログラムでは本年度も学生を受け入れたが、プログラムの現状がツイニング・プログラム本来の目的を実現できていないこと、及びその将来性について不透明であることが明らかになった。従って、ハノイ・サテライトの業務内容の調査及び本学の要求事項の整理をしたうえで、サテライトの契約継続の可否を含めて来年度1年間かけて検討していくこととなった。

7.2 インドネシア政府派遣への対応

インドネシア政府派遣の留学生受け入れを実現するため、インドネシア政府が求める、授業料減免、宿舍の提供、期間内の学位取得の保証等の特別な支援措置等の可否について検討したが、来年度は学内で正式な対応を詰め、インドネシア政府と直接交渉していくこととなった。

II. 学生交流部門

1. 留学生受け入れの傾向

平成25年度は留学生受け入れ実績の推移を分析し、現状の把握と今後の留学生受け入れに関する方向性について担当部門で議論をおこなった。本学における留学生の受け入れ数は、平成21年の326人から平成25年の257人へと、過去5年間で約20%の減少をみた。これは主として大学院進学留学生、特に中国とインドネシアからの留学生が大幅に減少したことに起因する。一方、学術交流協定校からの交換留学生の受け入れは堅調で、概ね50人から60人で推移している。

留学生はキャンパスの国際化をすすめ、多様性を提供する存在として重要である。そのため、国際交流推進センターでは、交換留学生の短期および超短期プログラムによる留学生の受け入れ増加および様々な国々からの留学生受け入れを目指した。短期プログラムでは、既存の交換留学プログラムであるSPACEを、SPACE-EとSPACE-Jの二つのプログラムとして再編した。これにより、日本語により専門科目を履修したいと希望する留学生に充実した教育および支援を提供するとともに、これまで以上に門戸を広げることになった。

さらに、多様な文化的・民族的バックグラウンドをもつ交換留学生の受け入れと学術交流協定校との教育交流の発展を目的とした、「佐賀大学特別聴講学生・特別研究学生等学習奨励費支援事業」を立ち上げた。本事業では、月額5万円を留学期間中支給するもので、奨学金がなければ留学が困難な途上国の学生や、受け入れが停滞している欧米諸国の学生に支給することで、本学への留学を誘引することが期待されている。

2. 交換留学生プログラム

2.1 佐賀大学短期交換留学プログラム (SPACE) の改革

■SPACE-E プログラムの改革

SPACE-Eは協定校の正規学生を対象とした交換留学プログラムで、英語により教育・指導・支援をするものである。留学生が交換留学プログラムに参加しやすくするため、いくつかの改革を実施した。

(1) 受入定員の拡大

SPACE-Eは平成25年度より定員を30人に増やした。また、これまで受入開始時期を10月のみに限定していたが、4月からの参加も可能とし、さらには1学期間だけの留学も可能となった。受入学生数は前期23人、後期30人であったが、半年滞在の学生数は、前期3人で、後期2人であった。提携校への認知がさらに進めば半年滞在が増えることが考えられる。全体としては、前期に3人増えたが、30人には達しなかった。後期は、10人増え、30人に達した。

(2) 奨学金

後期に学生数が増えたのは、JASSOの奨学金受給者が14人、佐賀大学の奨学金受給者が5人いたおかげであろう。佐賀大学奨学金は、SPACE-Eの特徴である多文化の地域・国出身の学生が学ぶことを達成することを保証するために2013年4月から用意することにしたものである。JASSO奨学金を獲得することができ、奨学金数が例年以上に充実した。

(3) カリキュラムの充実

平成25年4月よりSPACE-Eに参加する理工学部と農学部の交換留学生については、「自主研究」を必須科目

とした。また選択科目も「都市システム学トピックス」、「言語と文化の諸相」、「我が国の環境保全の最新情報」の3科目が追加された。

■SPACE-Jプログラムの新設

SPACE-Jは平成25年10月に新規開設されたプログラムである。日本語で専門科目を履修する交換留学生の受入は以前より行なっていたが、プログラム化されておらず、交換留学生が学習や課外活動を通して日本社会や文化の理解ができているのかを把握することができなかった。プログラム化により、プログラムを担当する教員と各学部の受入教員とが、交換留学生の学業や生活面でのアドバイスを行なうことが可能となった。また毎週の日本事情研修では、日頃は異なる専門の授業を履修する交換留学生が集まり、教室内外で日本社会を様々な角度から学んでいる。さらに、専門科目を日本語で履修するための日本語の運用能力が不十分であると判断された学生には、ブリッジプログラムで日本語をしっかりと修得するという取り組みも開始した。

2.2 SPACE-E 実施報告

1. SPACE 春学期（2013年4月～9月）

■コース概要

平成24年10月に入学した第12期の学生17人が、継続して平成25年春学期の科目を学修した。また新たに、平成25年4月入学の学生8人を受け入れた。計25人の学生の出身国別の人数は、中国9人、台湾6人、韓国2人、ベトナム1人、フランス2人、アメリカ2人、タイ3人である。受け入れ学部別に見ると、文化教育学部15人、経済学部3人、理工学部3人、農学部4人となっている。

学生は全員、必修科目である「日本語」および「日本事情研修B」、そして各学部が提供している「専門選択科目（英語による講義）」を履修した。これらの他に、理工学部と農学部に所属する学生は、「自主研究」を履修し、自分の研究課題を設定して受け入れ教員から個別に指導を受けた。「日本語」は、能力別クラスになっており、レベル1（日本語総合Ⅰ）からレベル6（上級）までであるが、表1には日本語総合Ⅰから総合Ⅲまでを掲載している。

平成25年10月に新たに第13期の学生25人が入学した。4月に入学した学生8人のうち3人は8月に帰国したが、残った5人と合わせて30人が秋学期の科目を学修した。出身国別の人数は、中国5人、台湾7人、韓国1人、ベトナム1人、フランス2人、アメリカ1人、カナダ1人、インドネシア3人、タイ5人、ラオス1人、バングラデシュ1人、スリランカ2人である。受け入れ学部別に見ると、文化教育学部17人、経済学部4人、理工学部4人、農学部5人となっている。

■コーディネーター

古賀 弘毅 准教授（全学教育機構） 丹羽 順子 准教授（全学教育機構）

平成25年度春学期授業（平成25年4月～8月）

	月	火	水	木	金
I	総合Ⅰ(全) 総合Ⅱ(全) 総合Ⅲ(全)	総合Ⅰ(全) 総合Ⅱ(全) 総合Ⅲ(全)	総合Ⅰ(全) 総合Ⅱ(全) 総合Ⅲ(全)	総合Ⅰ(全) 総合Ⅱ(全) 総合Ⅲ(全)	総合Ⅰ(全) 総合Ⅱ(全) 総合Ⅲ(全)
II	環境化学入門(工)	総合Ⅰ(全) 総合Ⅱ(全) 漢字・語彙Ⅲ(全)	日本の政治経済(経)	漢字・語彙Ⅰ(全) 漢字・語彙Ⅱ(全) 都市システム学トピックス(工)	文化と化学(文)
III		言語学における野外 手法Ⅱ(全)			
IV	日本に関するWEB ページ制作応用(文)	応用微生物学(農)	日本事情研修B(全)		
V			概説・農学と環境学 (農)		

(全)：全学教育機構 (経)：経済学部 (農)：農学部 (理)：理工学部 (文)：文化教育学部

春学期の視察・見学等

H25年	4月	学外研修（福岡市民防災センター、九州国立博物館、太宰府天満宮）
	5月	日本文化研修（茶道研修）
	6月	鹿島市の高校生との交流会およびホームステイ、鹿島ガタリンピック参加
	7月	学外研修（キューピー鳥栖工場、キリンビール工場）

春学期 入学者（3ヶ国 6大学 8人）

	国籍	性別	奨学金区分	大学名	在学期間
1	中国	男	私費	浙江科技大学	1年
2		女	私費		1年
3		女	佐賀大学奨励費	浙江理工大学	半年
4		女	私費		1年
5	タイ	男	JASSO	チェンマイ大学	1年
6		女	私費	コンケン大学	1年
7		男	私費	カセサート大学	1年
8	オーストラリア	女	佐賀大学奨励費	シドニー工科大学	半年

平成25年秋学期の授業（平成25年10月～平成26年3月）

	月	火	水	木	金
I	総合Ⅰ(全) 総合Ⅱ(全) 総合Ⅲ(全)	総合Ⅰ(全) 総合Ⅱ(全) 総合Ⅲ(全)	総合Ⅰ(全) 総合Ⅱ(全) 総合Ⅲ(全)	総合Ⅰ(全) 総合Ⅱ(全) 総合Ⅲ(全)	総合Ⅰ(全) 総合Ⅱ(全) 総合Ⅲ(全)
II	開発経済学持論(経)	総合Ⅰ(全) 総合Ⅱ(全)		日本の野菜(農)	理工学紹介A(理)
III	日本に関するWEB ページ制作入門(文)			我が国の環境保全の 最新情報(文)	
IV		朝鮮現代政治(文) 言語と文化の諸相(文)	日本事情研修A(全)	日本・東南アジア関 係論(文)	

(全)：全学教育機構 (経)：経済学部 (農)：農学部 (理)：理工学部 (文)：文化教育学部

秋学期の視察・見学等

H25年 11月	学外研修（バルーンフェスティバル）
11月	学外研修（熊本城、水前寺公園）
12月	学外研修（国際交流 in 吉野ヶ里）
H25年 2月	学外研修（羊羹資料館、酒蔵見学）

秋学期 入学者（11ヶ国 18大学 25人）

	国籍	性別	奨学金区分	大学名	在学期間
1	台湾	女	私費	国立中興大学	1年
2		女	JASSO		1年
3		女	交流協会		1年
4		女	私費	国立台北大学	1年
5		女	佐賀大学奨励費		1年
6		男	私費	国立東華大学	1年
7		女	私費		1年
8	中国	女	私費	華東師範大学	1年
9		女	私費	浙江科技大学	1年
10		女	私費	中国農業大学	1年

11		女	JASSO	ガジヤマダ大学	1年
12	インドネシア	男	JASSO	ボゴール大学	1年
13		女	JASSO		1年
14	タイ	女	JASSO	カセサート大学	1年
15		男	JASSO	コンケン大学	1年
16		男	JASSO	モンクット王カラバン工科大学	1年
17	フランス	男	佐賀大学奨励費	オルレアン大学	1年
18		女	佐賀大学奨励費		1年
19	スリランカ	女	JASSO	ペラデニア大学	1年
20		女	JASSO		1年
21	アメリカ	女	JASSO	パシフィック大学	1年
22	カナダ	男	JASSO	マニトバ大学	1年
23	ラオス	女	JASSO	国立ラオス大学	1年
24	バングラデシュ	男	JASSO	チッタゴン工科大学	1年
25	ベトナム	女	JASSO	ベトナム国家大学ハノイ外国語大学	1年

2.3 SPACE-J 実施報告

■コース概要

SPACE-Jは、平成25年10月に新規開設されたプログラムである。定員はSPACE-Eと同様、30人である。従来「特別聴講学生（一般）」として在籍していた学生のうち、希望者については、SPACE-Jへの移行を認めた。その結果、12人がSPACE-Jに移行した。新規の入学者13人と合わせて25人を受け入れた。出身国別内訳は、中国10人、韓国9人、台湾3人、カンボジア2人、ベトナム1人であった。来日時に日本語のプレースメントテストを行い、日本語能力を判定する。日本語が中上級・上級レベルであると判定された学生は、佐賀大学が提供する専門科目を自由に履修することができる「レギュラーコース」に参加する。また、初中級および中級レベルであると判定された学生は「ブリッジコース」に参加し、日本語で専門科目を履修するために必要な高度な日本語能力を養うことを目指す。それぞれのレベルに見合った日本語科目を必修とする。

■コーディネーター

布尾 勝一郎 准教授（全学教育機構）

平成25年度秋学期の授業（平成25年10月～平成26年～3月）

	月	火	水	木	金
I	総合Ⅰ(全) 総合Ⅱ(全) 総合Ⅲ(全)	総合Ⅰ(全) 総合Ⅱ(全) 総合Ⅲ(全)	総合Ⅰ(全) 総合Ⅱ(全) 総合Ⅲ(全)	総合Ⅰ(全) 総合Ⅱ(全) 総合Ⅲ(全)	総合Ⅰ(全) 総合Ⅱ(全) 総合Ⅲ(全)
II	開発経済学持論(経)	総合Ⅰ(全) 総合Ⅱ(全)		日本の野菜(農)	理工学紹介A(理)
III	日本に関するWEB ページ制作入門(文)			我が国の環境保全の 最新情報(文)	
IV		朝鮮現代政治(文) 言語と文化の諸相(文)	日本事情研修A(全)	日本・東南アジア関 係論(文)	

(全)：全学教育機構 (経)：経済学部 (農)：農学部 (理)：理工学部 (文)：文化教育学部

平成25年度後学期は、20人がレギュラーコースに、5人がブリッジコースに参加した。なお、ブリッジコース参加者のうち、翌年度も引き続き在学する3人は、学期終了後に「ブリッジ修了テスト」（聴解、読解、作文、会話）を受験し、いずれもレギュラーコースへの移行が認められた。

1) 「日本事情研修」

SPACE-Jの特徴として、必修の日本事情科目が挙げられる。日本文化の多様性や日本の地方都市の持つ人的、文化的豊かさに触れるため、佐賀県内の日本人を招いて労働観や仕事について意見交換をしたり、学外見学を行った。

2) 奨学金

JASSO奨学金が得られない場合は、佐賀大学が独自に大学から奨学金をSPACE-Jの学生のために平成25年度から支給することとした。本年度の奨学金受給者は16人（JASSO12人、佐賀大学奨学金4人）と、参加者総数25人のうち、64%が受給することができた。SPACE-Jの学生数と奨学金受給者数は下記のとおりである。

SPACE-J 学生数

		平成25年10月～平成26年3月		
学生数 (内訳)		合計 25人		
	特別聴講学生（一般）から移行	新規来日、半年滞在	1年滞在で1学期目	
	12人	2人	11人	

奨学金受給者数

	平成25年10月～平成26年3月
JASSO 奨学金	12人
佐賀大学奨学金	4人

奨学金についての課題は、SPACE-Eと同様である。年度により奨学金受給可能な学生が変動することにより、プログラム運営が困難になる点である。とりわけ、SPACE-Jにおいては、プログラム参加者の出身国が特定の国々（中国・韓国・台湾）に偏ってしまうことで、他国からの留学生と交流をしながら多元的な価値観に触れる経験を持つことが難しくなる。

秋学期の視察・見学等

H25年 11月	学外研修（福岡市民防災センター、九州国立博物館、太宰府天満宮）
12月	学外研修（国際交流 in 吉野ヶ里町）
12月	学外研修（鹿島市、肥前浜宿、干潟展望館、酒蔵見学）

秋学期 入学者（2ヶ国 10大学 15人）

	国籍	性別	奨学金区分	大学名	在学期間
1	中国	女	JASSO	西南政法大学	1年
2		女	JASSO	浙江大学城市学院	1年
3		男	私費	浙江理工大学	1年
4		男	JASSO	華東師範大学	1年
5	台湾	女	JASSO	国立政治大学	1年
6		女	JASSO	文藻外語学院	1年
7		女	JASSO	輔仁カトリック大学	1年
8	韓国	女	JASSO	釜慶大学校	1年
9		男	JASSO	国民大学校	1年
10		男	JASSO	全南大学校	1年
11	カンボジア	男	JASSO	王立プノンベン大学	1年
12		男	JASSO		1年
13	ベトナム	女	JASSO	ベトナム国家大学ハノイ外国語大学	1年

3. 日本語・日本文化研修コース実施報告

■コース概要

平成25年は本学日本語・日本文化研修コースにとって、大きな変化の年となった。第一に、日本語・日本文化研修コースの規則と細則が、国際交流推進センター（規則）と全学教育機構（細則）制定され、それまで、文化教育学部限定されていた受け入れ部局が、全学的に拡大されたことだ。もともと本学の日本語・日本文化研修コースは、研修生が日本語の能力を伸ばすだけでなく、地域のことを学び、日本文化や日本語についての知識を学べるようなコースとなっていたが、これにより、日本文化に関して、非常に幅広い分野に興味を持つ学生たちを受け入れられるようになった。この規則は、平成25年度後期から受け入れの学生たちに適用されている。

第二に、協定校以外から佐賀大学で学ぶ日本語・日本文化研修留学生を複数名迎えることができたことだ。平成24年度後期からのヴィリニウス大学（リトアニア）からの研修生に続いて、平成25年度後期には、ストックホルム大学（スウェーデン）、リール第3大学（ベルギー）、ロシア-アルメニア大学（アルメニア）から各1人、合計3人の研修生入れることになった。ヴィリニウス大学（リトアニア）からの研修生は、文化教育学部の受け入れ教員の指導のもと、専門に関する研究を深めただけではなく、外国人留学生のための日本語コースも受講し、日本語能力も伸長させた。また、チューターやクラスメイトとの交流を通して、日本文化をより理解するとともに、留学生／日本人学生交流プロジェクトにも積極的に参加して、日本人学生とグループで調査／発表プロジェクトに取り組んだ。また、サークル活動にも積極的に参加し、日本の大学文化を体験した。この研修生は、所定の単位を無事に取り終え、無事修了した。後期から受け入れた3人の研修生は、共通の授業を受講するとともに、相互の交流を活発に行い、本学初めての「日研生コミュニティ」を形成している。後期は、日本語能力を伸ばすために、外国人留学生のための日本語コースの科目を多く受講しているが、来年度前期には、それぞれの専門の興味を生かした授業選択を行ってくれることを期待している。

■開講期間

平成24年10月～平成25年8月

平成25年10月～平成26年8月

■コーディネーター

中山 亜紀子 准教授（全学教育機構）

平成24年秋学期 入学者（平成24年10月～平成25年8月）

国名	性別	奨学金区分	大学名	在籍期間
リトアニア	女	国費	ヴィリニウス大学	1年

平成25年秋学期 入学者（平成25年10月～平成26年8月）

国名	性別	奨学金区分	大学名	在学期間
スウェーデン	男	国費	ストックホルム大学	1年
ベルギー	女	国費	リール第三大学	1年
アルメニア	女	国費	アルメニア大学	1年



修了式にて

4. サマープログラム

4.1 Saga University Summer Program 2013 実施報告

期 間：平成25年7月9日～25日

参加人数：海外協定校の学生22人、佐賀大学生12人

コーディネーター：山田 直子 准教授・藤田 清士 教授（国際交流推進センター）

平成23年1月に策定された佐賀大学の国際戦略構想に掲げられた一つの目標が「サマー国際キャンパス」である。海外重点大学国内の関係大学等と連携して、研究者や学生を受け入れるという計画に基づき、平成25度は本学としては初めての試みであるサマープログラムを実施した。海外重点大学の学生を対象とするプログラムは“Creating Innovation for Sustainability in Young Leaders”というテーマを掲げ、プログラムを通して持続可能な社会の実現のために若者がどのような貢献をすべきかについて様々な側面から検討した。

初年度である平成25年度は8カ国・地域の協定校より22人の留学生と12人の佐賀大学の学生が参加した。地球規模での連帯と協力が不可欠な持続可能な社会の構築をテーマに、1週目に「農業・食・地域」、2週目に「環境とエネルギー」、最終週には「伝統文化・技術の継承」に焦点をあて、学内の専門家による講義のほか、市民団体との森林保全や農作業等の協働活動、自治体との連携による視察などを通じて実践的に学習した。またプログラム期間中は、佐賀大学の学生との2泊3日の北山少年自然の家での合宿や一般家庭でのホームステイ、市民グループとの協働活動など、人的交流を通して、佐賀や日本についての理解を深めた。最終日には、プログラムを通して得た知識や経験をふまえ、佐賀・日本の事例から学ぶこと、持続可能な社会を実現のための提言をグループで発表した。参加学生からは「資源を持たない日本だからこそ、自然環境の保全、エネルギーの効率的な生産と利用、新エネルギーの開発への努力が顕著で、資源が豊富な国に住む自分にとっても学ぶべきことが多かった」や、「持続可能な社会を達成するためには、若者への意識付け、活動への参与を促す取り組みが重要」など様々な意見が交わされた。3週間の短期プログラムだったが、参加学生は佐賀大学の特色ある研究や教育に触れ、地域の企業や自治体、市民団体による先進的な取り組みを学び、そこで働く人々の深い思いを理解する機会となった。このプログラムにより、参加学生の多くが本学への長期留学を志し、海外協定校との交流がますます活発なものになることが期待される。



SUSP 学生と佐賀大学生



森林保全学習（竹の伐採）

4.2 香港中文大学・佐賀大学サマーキャンプ実施報告

期 間：平成25年7月9日～16日

参加人数：香港中文大学生10人、佐賀大学生10人

コーディネーター：吉川 達 講師（全学教育機構）・藤田 清士 教授（国際交流推進センター）

平成25年7月9日から16日にかけて、香港中文大学・佐賀大学サマーキャンプ2013を開催した。佐賀大学と香港中文大学学生交流プログラムは、両大学の双方向の交流を活性化するために、平成24年度より実施している。平成25年2月には佐賀大学生8人が国際都市香港を訪問し、香港中文大学学生と活発な議論を行うと同時に、商業施設や文化施設を訪れ、香港の歴史や経済を積極的に学んでいる。今回は、日本語教育などを専門とする香港中文大学学生10人が佐賀大学を訪問し、様々な講義を受けると同時に佐賀県内で実践学習を体験しました。サマーキャンプでは、「日本の食と文化」「佐賀の伝統食」「佐賀の伝統技術と文化の継承」「森林保全」「農業体験と農村」などの学習を10日間で集中的に行なった。最終日には学習した内容を香港中文大学学生のグループが発表した。本プログラムの特色は、両大学の学生同士が、それぞれの学習の場で、親密に交流しながら互いに学びの姿勢を吸収することで、本サマーキャンプを通じて活発な学生交流が行われ、充実した学習プログラムとなった。



九州陶磁文化館見学



天山酒造視察

5. 留学生支援

平成25年度は、新規渡日の留学生に対する予防教育の一環として、これまで実施してきた研修旅行の目的と活動内容を大幅に変更した。留学生が佐賀大学において心身ともに健康で、安心・安全に学業生活を送るための予防教育として位置づけ、新しい環境に適応するために必要な知識や情報、ネットワークづくりを促す研修内容を盛り込んだ。本研修には国際交流推進センター専任教員以外に、日本語教員、各学部の留学生担当教員、グローバルリーダーズのメンバーが連携・協力して研修を実施し、新入留学生に対してきめ細やかなアドバイスを提供した。

平成25年度も留学生に関わるトラブル、不適応、ハラスメント等の問題が複数発生したが、プログラム担当教員、受け入れ学部・研究科、国際交流推進センター教員、国際課が連携して問題解決にあたった。これまでの経験から、関係者間の情報伝達・共有および連携は、問題を適切に解決するために最も重要なものであることが認識された。平成26年度は、危機管理マニュアルの作成が急務であると思われる。

6. キャンパスの国際化

6.1 グローバルリーダーズ

佐賀大学キャンパスにおける国際交流活動を促進するため、国際交流推進センターの教職員とともにプログラムやイベントを企画・運営する学生リーダーを募集し、平成24年5月より活動を開始した。グローバルリーダーズは、多様な文化や価値観を尊重しながら学習・研究・知的交流ができるキャンパスとはどのような空間かを学生自らが考え、リーダー個々が備える資質や能力を最大限に発揮することが求められる。平成25年度は交換留学からの帰国学生や留学生を中心に1人のメンバーが活動に携わった。

リーダーズ活動の軸は、毎日お昼休みに開催する「ランゲージ・ラウンジ」である。授業と授業の合間の1時間という慌ただしさはあるが、持参した昼食を食べながら留学生と日本人学生が決まった外国語での会話を楽しんでいる。平成25年度は韓国語、英語、中国語、日本語、フランス語のラウンジが学期を通して開催された。各ラウンジでは、1～2人のリーダーズがファシリテーターとなり、ゲームなどのアクティビティや会話のテーマを準備している。語学の授業とは一味違った、学生ならではの思考を凝らした取り組みを行っている。平成25年度のその他の活動としては、4月と10月の新入留学生研修旅行サポート、7月のサマープログラムにおける文化交流イベント「カルチュラル・ナイト」、留学生と日本人学生と一緒にパフォーマンスを披露する「パフォーマンスナイト」を行なった。また年度末の3月には、唐津でリーダーズ研修を行い、取り組みを発展させるためのスキル向上と新年度に向けての課題と計画を検討した。



ランゲージ・ラウンジ活動

7. 学生の海外派遣

7.1 交換留学生の派遣

平成25年度は、交換留学の派遣先大学の拡大をめざし、特に留学希望の多いヨーロッパ地域の高等教育機関との交渉を行った。その結果、フィンランドのユバスキュラ大学とリトアニアのウタスマダヌス大学との学術交流協定書の締結を実現した。これら2大学には、それぞれ1人の佐賀大学生を平成25年度中に派遣することができ、実質的な学生交流の形で実を結んだ。

さらに欧米圏に偏っていた学生の留学志向をバランスのとれたものにするために、アジア諸国へ交換留学をする学生への教育支援プログラム「アジアで活躍するリーダー養成プログラム」を開始した。本プログラムでは、現地での学習や経験をより豊かなものにし、最終的には派遣先国の理解、ネットワーク形成、人間的成長を促すことを目指している。本プログラムは日本学生支援機構の支援事業に採択され、9人の学生が奨学金（月額6万円又は7万円を一年間）を受給することができた。これにより、アジア諸国への派遣数が半数を占め、欧米圏とアジア圏のバランスが改善された。また平成25年度に派遣されたすべての学生はJASSO、あるいは佐賀大学独自の奨学金のいずれかを受給し、経済的支援を受けることができた。交換留学を行なう本学学生への経済的支援は、平成24年度に開始した個人で行う留学に対する支援に修正を加え、交換留学生を対象とした給付額30万円（1年間の留学）の奨学金を支給することとした。平成25年度は7人の学生が本支援を受けて海外に留学し、支援総額は195万円となった。以下の表が示すとおり、海外協定校へ派遣されたすべての交換留学生が奨学金を受給した。

■アジアで活躍するリーダー養成プログラム派遣学生

	氏名	学部	国名	大学名	受給奨学金
1	牧野 美紀	文化教育学部	中国	浙江理工大悪	JASSO
2	原 千恵子			北京工業大学	
3	持木 麻里		台湾	国立政治大学	
4	藤川 愛				
5	武廣沙也香		韓国	釜慶大学校	
6	中村 弥那		タイ	チェンマイ大学	
7	蘭 理沙	経済学部	韓国	国民大学校	JASSO
8	朴 美来				
9	木下 歩美		中国	北京工業大学	
10	大水 希望		スリランカ	ペラデニア大学	

短期の海外研修に参加した学生が次のステップとして交換留学を位置づけ、交換留学に求められる語学力や準備などに意欲的に取り組む仕組みづくりを検討することが今後の課題である。また、経済的な卒業が1年間遅くれること、就職活動を同学年の学生と一緒に進められないこと、公務員試験、教員採用試験、教育実習等の日程の調整など、交換留学を検討する上で学生が懸念することが非常に多い。

■アジア以外の協定校へ派遣された学生

	氏名	学部	国名	大学名	受給奨学金
1	末永 成	教育学研究科	オーストラリア	ラトローブ大学	奨励費
2	納富 晶		アメリカ	スリッパリーロック大学	奨励費
3	副島奈央子	文化教育学部	カナダ	ウィルフリッドロリエ大学	奨励費
4	真崎 陽子				後援会
5	梅崎恵理奈		アメリカ	パシフィック大学	奨励費
6	中尾 友紀		リトアニア	ヴィタウタス・マグヌス大学	後援会
7	野中 結		フランス	オルレアン大学	後援会
8	堀口 祥子			ブルゴーニュ大学	校友会
9	綿村 遼実		オーストラリア	シドニー工科大学	奨励費
10	川良 邦弘	経済学部	アメリカ	パシフィック大学	後援会・校友会
11	プレブドルジ バーサン			スリッパリーロック大学	後援会・校友会
12	齋藤 愛美		フィンランド	ユバスキュラ大学	奨励費
13	舟越 拓也		オーストラリア	シドニー工科大学	奨励費

7.2 SUSAP (Saga University Study Abroad Program) の実施

国際交流推進センターでは、平成25年度より「学生の海外志向を引き出す海外研修・国際交流プログラム」の拡充を目指し、多様な海外学習の機会を多くの学生に提供するための取り組みを進めてきた。平成25年度は5カ国、6機関の協力を得て、6つのプログラムを実施し、合計64人の学生（応募者数は75人）を書類および面接審査により選抜し派遣した。参加者の傾向をみると、長期休暇をインターンシップや就職活動の始まっていない、学部1、2年生が83%を占めている。平成25年度は新たなプログラムとして、大邱大学校（韓国）と浙江理工大学（中国）との連携により、学術交流協定に基づく派遣（授業料不徴収）の実施が実現した。これにより、学生の多様な関心やニーズに応えながら経済的な負担を抑えた教育プログラムを提供することができた。また、これらの学生交流（受入と派遣）のインバランスが大幅に改善された。

SUSAPは、語学の学習を主とするもの（パシフィック、モナシュ、オークランド）と異文化交流や現地社会についての理解を主眼としたもの（香港、韓国、中国）に分けられるが、いずれの各プログラムのプログラムも現地学生や地域の人々との密接な交流を通して現地社会や文化を理解すること、あるいは現地に留学している世界各国の同世代の学生との意見交換を積極的に行い、視野を広げることを共通のねらいとしている。そのため事前研修では、主体的・積極的な参加が必須であることを強調し、これまでの受け身型の学習方法を見直す機会としている。今後取り組まなければならない課題として、参加学生がプログラムを通じて、どのような成果が得られたのかについて質的・量的調査を行い、プログラムの再評価と改善を行なう必要があると考えている。

7.2.1 米国・パシフィック大学プログラム

- 【実施期間】 平成25年 8月23日～9月22日（4週間）
- 【参加学生】 14人
- 【単位認定】 「英語BまたはC」 2単位
- 【担当教員】 コールマン・サウス 准教授（全学教育機構）

平成25年 8月23日～9月22日まで、パシフィック大学研修プログラムを行った。4週間のプログラムで、教室の英語学習は週12時間、日本人が苦手とするオーラルスキルを中心に取り組み、日常会話だけでなく、ディスカッションやプレゼンテーションスキルの向上も目指すプログラムとなっている。参加学生は、渡航前に事前オリエンテーションの中でプレースメントテストを受け、習熟度別のクラス（上級・中級・初級）に配置された毎週火曜日と木曜日はパシフィック大学により計画されたフィールドトリップに参加し、アメリカ北西部の自然や社会、特有の文化について学ぶ。現地では一般家庭にホームステイすることにより、アメリカの生活を体感した。フィールドトリップは、佐賀大学の学生のみが参加、語学の授業は、他の国からの留学生も参加した。



パシフィック大学キャンパスにて



アクティビティー時にみんなで

7.2.2 オーストラリア・モナッシュ大学プログラム

- 【実施期間】 平成26年2月15日～3月15日（4週間）
 【参加学生】 4人
 【単位認定】 「国際交流実習」2単位
 【担当教員】 山田 直子 准教授（国際交流推進センター）



クラスメイトとの記念撮影



クラスルームの様子

本プログラムは、英語圏への留学に必要な高い英語の運用能力や学術スキルを身につけることを目的として平成24年に立ち上げられた。参加学生はアカデミックイングリッシュ（AE）コースに入り、様々な国の出身者とともに授業に参加した。モナッシュ大学の英語プログラムは、多くの日本の高等教育機関に高く評価され、非常に多くの日本人学生が学んでいることから、前年度はクラスの8割以上が日本人学生で占められるような状況が発生していた。平成25年度は比較的改善されていた。本プログラムでは、英語学習に加え、身につけた英語力を実践的に使いながら、オーストラリアにおけるサステイナブルツーリズムに関する2日間の活動にも参加する。サステイナブルツーリズムに関する諸問題について日本語により講義を受けた後、フィリッパアイランドにおいて野生保護活動に参加した。さらに期間中、本学の協定校であるラトロブ大学を1日訪問し、キャンパスツアー、日本語クラスでの発表、現地学生との交流を楽しんだ。交換留学中の佐賀大生とも会い、学生生活の違いや長期留学の醍醐味などについて話を聞く機会を得た。

7.2.3 オークランド大学プログラム

- 【実施期間】 平成26年 3月 7日～31日（3週間）
- 【参加学生】 10人
- 【単位認定】 「国際交流実習」2単位
- 【担当教員】 山田 直子 准教授（国際交流推進センター）

2週間の英語集中授業を受講し、最終週は「ニュージーランドの人々と社会」というテーマで学習した。昨年度は2月～3月にかけてのプログラムであったため、現地で日本人学生が過半数を占める点が課題であった。平成25年度は日本人学生の多い時期を避け、3月上旬からの3週間としたため、日本人学生が大半を占めるようなことにはならなかった。またプログラムではオークランド市内の高校訪問や、オークランド大学の学生への聞き取り調査を実施するなど、より深く現地社会を理解する機会に恵まれた。特に、マオリ族の子供が通う高校に訪問し、高校生からマオリ族のダンスを学び、マオリの若者の日常や将来の夢などについて意見交換をした経験は、参加学生に大きなインパクトを与えた。また、一般家庭でのホームステイを通じて、ニュージーランドの社会や文化を学ぶ機会を得られた。移民者の家庭、国際結婚の家庭など、多様な家庭形態があることを知り、ニュージーランド以外の文化に触れることができた。



福岡空港から出発する研修参加者10人



オリエンテーションの様子

7.2.4 中国・香港中文大学学生交流プログラム

【実施期間】 平成26年2月23日～3月4日（10日間）

【参加学生】 10人

【単位認定】 「国際交流実習」2単位

【担当教員】 吉川 達 講師（全学教育機構）

本年は JASSO 海外留学支援制度に採択されたこともあり、前回より応募者が大幅に増加したが、応募者、参加者ともにほとんどが文系学部の学生であった。参加学生の英語に対する抵抗感は昨年ほど強くなく、英語での授業の見学においても、内容を理解している学生も多かった。昨年と異なる活動として、現地の中学校（日本の高校に相当する学年）に訪問し、日本語を学ぶ中学生との交流会を行なった。また昨年度に引き続き、在香港佐賀県人会の協力の下、現地で活躍している社会人11人の方との意見交換会を行った。さらに今年度は、県人会の方々と共に外国人墓地にある佐賀県出身者の墓掃除を行った。明治時代の外交官、商社の駐在員等10基程度佐賀出身者の墓かおり、それをひとつひとつ磨いて回った。最後に、佐賀大学生は二人一組のペアで自主課題調査を行った。テーマは「香港の教育制度と教育現場」「香港の観光や街並み」「日本からの輸入品と若者文化」「香港の食と経済」「香港人の生活と文化（お茶や建築の観点から）」で、限られた時間ではあったが、香港中文大学生の助けも借りながら、内容のある発表を行っていた。



香港中文キャンパスにて



現地学生との交流

7.2.5 韓国・大邱大学校プログラム

- 【実施期間】 平成26年2月28日～3月29日（4週間）
【参加学生】 14人
【単位認定】 なし
【担当教員】 山田 直子 准教授（国際交流推進センター）

国際交流推進センターが初めて実施した韓国での短期研修プログラムである。学術交流協定に基づき、大邱大学が本学学生に対して1ヶ月間の短期プログラムを授業料免除にて提供するものである。大邱大学での研修内容は、週5日間（1日4時間）の韓国語授業と韓国映画、伝統工芸体験などの文化体験、韓国人学生との交流機会が提供された。当初、韓国語の授業を佐賀大学以外の大学の学生と共に受講する予定であったが、佐賀大学の参加者が非常に多く、学期途中で帰国しなければならないということから、初級学生以外は全員佐賀大学生クラスに配置されることになった。期間中、参加学生は大邱大学の国際寮に滞在し、世界の様々な地域からの留学生と共に交流し、異文化に触れることができた。また、大邱大学における研修以外に、釜山にある協定校の一つである釜慶大学との交流プログラムを実施した。両大学の学生はペアで博物館を觀賞し、キャンパスと釜山市内の散策の後、両大学の学生による大学紹介、日韓の文化受容についての発表、ディスカッション、懇親会に参加した。さらに釜慶大学に交換留学中の佐賀大生にも留学生活についての発表をしてもらい、大変有意義な時間となった。



大邱大学キャンパスにて



7.2.6 中国・浙江理工大学プログラム

- 【実施期間】 平成26年2月22日～3月17日（3週間）
 【参加学生】 12人
 【単位認定】 なし
 【担当教員】 山田 直子 准教授（国際交流推進センター）

国際交流推進センターが中国で初めて実施した短期プログラムである。学術交流協定に基づき、浙江理工大学が本学学生を対象として、3週間の短期プログラムを授業料免除にて提供するものである。初年度にも関わらず多くの学生が応募し、審査を経て12人の学生が派遣されることになった。研修内容は、午前には様々な国の学生と共に中国語を学び、午後には佐賀大学生のみを対象とした文化体験活動に参加した。太極拳、中国書道、中国料理の体験、漢方薬博物館や寺院、企業等の訪問など大変充実したプログラムであった。参加学生は浙江理工大学の国際寮に滞在し、多様な国の出身者と親密な交友関係を築きながら、異文化への理解や適応力を養った。プログラム最終日は、上海佐賀県人会幹事長であり、佐賀大学友好特使である江頭氏、佐賀大学への留学後、上海の建築会社で活躍する中国人卒業生、交換留学を経て中国の大学院に進学した本学卒業生による講演会を上海のホテルで開催した。また、上海ではグループごとにフィールドワークを行い、上海で流通する日本製品や導入されている日本のシステムなどについて調査を行い、成果を帰国後の事後研修において発表した。本プログラムに参加した参加者が一様に口にするのが、メディアの影響により中国に対するイメージが悪かったが、実際に現地に赴き、現地の人と交流をしたことで、自分の目で見聞きし、現地の人々と対話することが大切だと気づいたということである。



浙江理工大学キャンパスにて



クラスメイトと

8. 学生の海外派遣支援経費（国際化支援制度）

平成25年度の海外派遣支援は基本的に前年度を引き継ぐ形で3つの支援事業を展開した。ただし、長期の交換留学を行う学生に対する奨学金を充実させるために、前年度実施した個人で行う留学に対する支援を取り止め、交換留学生を対象とした給付額30万円（一年間の留学）の奨学金支給に変更した。平成25年度112人の学生が本支援を受けて海外に留学し、支援総額は840万円となった。

(1) 平成25年度佐賀大学海外研修参加助成（申請5件中5件採択）

	派遣先	参加者	期間	プログラム名	助成額
1	アメリカ合衆国 オレゴン州フォレストグローブ パシフィック大学	14	平成25年8月23日～ 平成25年9月22日	パシフィック大学語学研修 ホームステイプログラム2013	1,400,000円
2	オーストラリア メルボルン市 モナシュ大学	4	平成26年2月14日～ 平成26年3月16日	モナシュ大学プログラム2014	400,000円
3	中国・杭州 浙江理工大学	12	平成26年2月22日～ 平成26年3月17日	浙江理工大学プログラム2014	600,000円
4	韓国・大邱 大邱大学校	14	平成26年3月1日～ 平成26年3月29日	大邱大学校プログラム2014	700,000円
5	ニュージーランド オークランド市 オークランド大学	10	平成26年3月7日～ 平成26年3月30日	オークランド大学プログラム2014	800,000円
合計		54			3,900,000円

(2) 平成25年度佐賀大学学生海外研修支援事業（申請11件中8件採択）

	申請者 所属	プログラム名	派遣国	交流大学・ 機関名	参加 学生数	対象学生	研修期間	助成額
1	小田 康友 准教授 医学部	ハワイ大学 臨床推論ワーク ショップ	アメリカ 合衆国	ハワイ大学 医学部	3	医学部 医学科 3～5年	H25. 8 H26. 3 (5日間)	150,000円
2	平地 一郎 経済学部長	国際交流実習	タイ王国	カセサート大学	10	経済学部 2年以上	H25. 10 (10日間)	500,000円
3	早瀬 博範 教授 全学教育機構	Cultural Immersion Program at Slippery Rock University in America	アメリカ 合衆国	スリッパリーロック大学	10	全学部 全学年	H25. 9 (13日間)	500,000円
4	相原 征代 講師 文化教育学部	「フランス語と フランス文化・ 生活体験」実習	フランス	トゥールーズ 第二大学 (ミライユ)	3	全学部 全学年	H26. 2-3 (14日間)	150,000円
5	石橋 孝治 教授 工学系研究科	タマサート大学との 連携による 建築・都市デザイン 国際教育ワーク ショップ	タイ王国	タマサート大学 工学部	10	工学系 研究科 修士 1, 2年	H25. 10 (8日間)	500,000円

6	藤村 美穂 准教授 農学部	アジア フィールドワーク	ミャンマー・ 韓国 インドネシア・ ベトナム	(韓国) 韓国農 林水産振興庁、 江原大学・農協 大学、忠北大学 (ミャンマー) 認定 NPO 法人 「地区う市民の 会」ミャンマー オフィス、JICA ミャンマーオフィ ス、MATARA (ミャンマー連 邦国境省)、 Taunggyi 大学 (インドネシア) The ministry of Marine and Fisheries、 ボゴール大学、 Bung Hatta 大学 (ベトナム) ア ンザン大学、ノ ンラム大学	10	農学部 生物環境 科学科	H25. 8～9 (5日間 又は 10日間)	500,000円
7	村松 和弘 教授 工学系研究科	高電圧・電力機器に 関する国際パート ナーシップ教育プロ グラム	中国	武漢大学 電気工程学院	5	工学系 研究科 修士前期・ 後期課程	H25. 9 (6日間)	250,000円
合計					51			2,550,000円

【採択プログラムの成果報告】

1. 小田 康友 准教授 (医学部) 「ハワイ大学臨床推論ワークショップ」

帰国した学生が、独自の報告会を実施したり、下級生の講義で報告することによって、卒前国際交流の意義を学生の視点で報告しえた。その中で例年課題として提起される医学専門英語の習得について、H25年度より、3 - 4年次に必修科目として専門英語教育が開講されることとなった。また、1年次の TOEIC 受験も必須となった。これは佐賀大学が英語教育や海外留学を重視する方針を取ったためではあるが、そのような機運を高め、実現するために、10年以上にわたって医学部での海外交流事業の中核を担ってきた本プログラムが果たしてきた役割は少なくないと考える。

2. 平地 一郎 経済学部 学部長 「国際交流実習」

本プログラムは1週間であるが、実際に実施した事前研修と海外研修において、講義(英語・日本語)、フィールド調査、報告書作成と発表会などの活動を総合して判断すると、同科目は1年分くらいのボリュームに相当すると評価できる。学生の国内外での報告、発表、反省会の成果状況から、日本のタイとの経済関係、特にタイとの経済発展に対する日本企業の貢献等に関する知識の獲得に極めて高い成果を上げていることが明らかとなった。したがって本プログラムの人材育成の効果は非常に高いと判断できる。

3. 早瀬 博範 教授（全学教育機構）“Cultural Immersion Program at Slippery Rock University in America”

ミニ留学として、アメリカの大学の正規の授業に参加したことが長期留学の具体的なイメージを与え、留学の動機づけをさらに高めさせた。約2週間という短期間ではあったが、ホームステイ、大学の正規の授業参加、英語によるプレゼン、アメリカの大学生がランゲージパートナーとしての毎日の交流、ニューヨークでのフィールドワークと、厳選されたプログラムの内容の良さが、目に見える成果につながった。また、費用面も比較的安く実施できた点は、今後の海外研修のモデルになりうる。研修先のスリッパリーロック大学が全面的に協力をしてくれ、プログラムが予想以上にスムーズに進み、成果も期待以上であった。研修前と研修後のTOEFLのスコアの比較分析をしたところ、10人中7人の点数が伸び、20点以上が2人、10点以上が2人であった。

4. 石橋 孝治 教授（工学系研究科）「タマサート大学との連携による建築・都市デザイン国際教育ワークショップ」

苦手な英語でのコミュニケーションに苦労しながらも、建築・都市デザイン特有の技術であるスケッチなどを交えながら、対象地に対する提案成果物の作成に取り組んだ。少なくとも、これまで国外で外国人と共に調査や成果物作成に取り組んだことがなかった学生にとって、この経験は非常に貴重であった。皆、今後のグローバル社会に対するいい経験になって自信になったと感想を述べており、成功であったと評価している。

5. 藤村 美穂 准教授（農学部）「アジアフィールドワーク」（インドネシア・ミャンマーコース）

ボゴール大学に留学中、あるいはジャカルタで就業中の佐賀大学農学部卒業生との交流もすることができ、学生にとっては海外で活躍する先輩の姿に触れることができ、よい刺激になった。ミャンマーについては、研修先はミャンマー連邦南シャン州地域で、研修の目的としては、南シャン州の少数民族の生業活動・生活文化・自然、及び日本のGO団体（認定NPO法人地球市民の会）による国際協力活動の実業を知るとともに、有機農業体験・植樹活動であった。今回もプログラム通りにタンボジ農業研修センターでの有機農業の体験、植樹活動と土着菌堆肥づくり、インレー湖の浮き畑とインレー湖の観光産業の見学、レーエインゴン村の小学校の訪問などを通して、多くのことを学んだことに研修の成果は大いに満足できるものであった。

6. 村松 和弘 教授（工学系研究科）「高電圧・電力機器に関する国際パートナーシップ教育プログラム」

学生は高電圧・電力機器に関する様々な講義・研究発表を聴講することにより、研究分野に関する視野が広がった。また、工場見学により、実際の危機のものづくりを知ることができた。学生が英語による教育プログラムに参加することにより、英語の必要性を認識するとともに、自身の英語力に自信が持てたと思われる。この経験は今後、国際コミュニケーション能力を確立するうえで大きいと思われる。

(3) 平成25年度佐賀大学学生海外派遣奨励費

	氏名	所属	派遣時 学年	指導教員	派遣国・大学	留学期間	留学助成金
1	納富 晶	教育学研究科 教科教育専攻	M1	早瀬 博範	アメリカ スリッパリーロック大学	10ヶ月	300,000円
2	末永 成	教育学研究科 教科教育専攻	M1	上野 景三	オーストラリア ラトロープ大学	6ヶ月	150,000円
3	副島奈央子	文化教育学部 国際文化課程	4	ホートン ステファニー	カナダ ウィルフリッドロリエ大学	8ヶ月	300,000円
4	梅崎恵理奈	文化教育学部 国際文化課程	4	早瀬 博範	アメリカ パシフィック大学	10ヶ月	300,000円
5	舟越 拓也	経済学部 経済システム課程	3	畑山 敏夫	オーストラリア シドニー工科大学	10ヶ月	300,000円
6	齋藤 愛美	経済学部 経済法律課程	3	丸谷 浩介	フィンランド ユバスキュラ大学	12ヶ月	300,000円
7	綿村 遼実	文化教育学部 人間環境課程	3	萱島 知子	オーストラリア シドニー工科大学	10ヶ月	300,000円
						合計	1,950,000円

【受給者の留学成果報告】

1. 納富 晶 (教育学研究科 教科教育専攻) アメリカ スリッパリーロック大学

第一に英語の運用能力である。その中でも留学生活においてこそ得られた能力としては、会話の中に織り交ぜられる冗談を言う能力と言われた冗談を理解する能力である。冗談を会話の中に挟んだり、挟み込まれた冗談を冗談と認識できるようになることは、英語で良好なコミュニケーションを取りたい場合は必須ともいえる能力であろう。いまだに英語母語話者のいう冗談は理解できてもなぜ面白いのかわからないことが多いが、自分なりに意味の通じる冗談を言えたりできるようになったことは私にとって非常に大きな収穫である。

第二にアメリカの大学という高等教育の気風を感じることができたことである。制度上の違いや学生の性質あるいは教職員の在り方など、日本との違いは枚挙に遑がない。何よりも収穫だと感じたことは、アメリカと日本のどちらの教育が優れていると決めることはできないということが分かった点である。

2. 末永 成 (教育学研究科 学校教育専攻) オーストラリア ラトロープ大学

まず、何よりも交換留学そのものが一番の成果である。将来、英語教員を目指す身として、留学を通して見たこと・聞いたこと・感じたこと、どの経験も成果であったと思う。特によかった点としては、語学学校・大学の両方に参加することができたことと思う。各国の英語学習者の様子を間近で見ることができたこと、その学習者がどのように大学生活への準備をし、どのようにキャリアを選択していくか。同時に、現地の学生はどのように大学生活を送り、キャリアを選択していくか。この二つの視点が私の大学生活を非常に有意義なものに変えてくれたと思う。

次には修士論文の研究テーマを決めることができたことであると思う。オーストラリアの教育を学習していく上で、どのような教材を使い、どのような学校教育論が用いられているなど、そのどれもがユニークで新鮮であった。日本の教育と比較し、様々な違いを明確にすることで、今後の日本教育の発展・維持に貢献することができればと思う。研究テーマは、オーストラリアでの教育教材として頻繁に使われていた「絵本」を取り上げる。国際感覚・批判的思考力の二つを教育の主な柱として、「絵本」を利用しながら、その能力向上が図られていたこ

とに強く関心を持ち、ぜひ日本でその絵本の効果的な利用について研究したいと思った。細かな内容などはまだ決まっていなかったが、確かな関心と共に修士論文作成に取りかかることができるということが、留学経験の成果である。

3. 副島奈央子（文化教育学部 国際文化課程）カナダ ウィルフリッドロリエ大学

学習面では課題のテキストを読みこなし、レポートを書いていくことにより、英語をアカデミックに使うことに慣れていった。また物事に対してなぜそうなるのか、どうすれば改善されるのかななどの批判的な思考を身に付けることができた。プレゼンテーションやレポートを書くときだけではなく、あらゆる場面で必要なものを身に付けることができよかったと思う。留学を通して、語学だけではなく、異文化間コミュニケーション力のある人間として成長することができた。これらの経験を生かしながらこれから英語そして交際交流にさらに力を入れてキャリアアップしていきたいと思う。

4. 梅崎恵理奈（文化教育学部 国際文化課程）アメリカ パシフィック大学

年間を通して、将来の英語教師になるという目標の為に受けた ESOL の授業では、Teaching Demonstration において、クラスメイトや教授から高い評価を受け、自分に自信を持つことができた。さらに日本語を学ぶ学生と交流するイベントや日本の文化を紹介するイベントに積極的に参加し、日本食の作り方やダンス、役立つ日本語を教えることで、日本の文化を知ってもらうよう活動した。Easter の時は子供たちの為に Egg Hunting のイベントを手伝った。日本にはない文化だったため大変興味深かった。さらに Intramural というアメリカのスポーツイベントに参加し、バレーボールを通じて友好関係を広めることができた。最後に、自分とは全く異なる文化的背景や人生観を持つ友人たちと積極的に交流することで、自分の考えをさらに深めたり、今までとは異なる視点から物事を見ることができるようになった。

5. 齋藤 愛美（経済学部 経営・法律課程）フィンランド ユヴァスキュラ大学

様々な国籍の友達とかかわる中でよりグローバルなコミュニケーション能力を身に付けられた。日本にいる間、場の調和を慮るあまり大勢の前で自分の意見を述べるのが苦手だった。しかし海外では自分の考えをしっかりと述べることを求められる場面が多く、少しずつ自分から前へ出るよう心掛けた。また、日本人ならではの気配りやおもてなしを見せると友達にとっても喜ばれた。日本人としての魅力を大切にしつつ、外国の人たちの良さも自分の中に取り入れることが出来た。語学力もこの1年で格段に向上した。机上の勉強は日本でもできるので留学中は日常英会話をマスターすることにフォーカスを置いた。はじめのうちは英語漬けの毎日にぐったりしていたのだが、最初のセメスターが終わるころには自然と聞き流しが出来るようになり、友達との会話や授業中にほとんどストレスを感じなくなった。今では「私は日常会話が出来ます」と自信を持って言える。

6. 舟越 拓也（経済学部 経済システム課程）オーストラリア シドニー工科大学

英語力の向上を第一の目的としてシドニー工科大学を選んだが、出国当時と比較してみても大きく飛躍したと思う。到着当時は全く話すことも聞くことも出来なかったが、月日がたつにつれて次第に慣れ、上達していった。それと同時に英語力向上のためのクラスにも自ら積極的に参加し、英語に関する小さな疑問点でさえも自発的に質問するように努めた。本来ツーリズム業界に関心があったので、後期からは Hotel Management というツーリ

ズムに関する教科も履修した。毎回の講義では佐賀大学では学べないような大変意義深い事柄を学習することができ、自分の将来のキャリアを広げる大きな一歩となった。語学力の工場のほかにも、この留学期間中に多数の人々と意見交換する機会を得て、今まで自分が見えていなかった価値観を見出すことが出来た。以上の点を踏まえて、この約1年間の留学期間の中で語学力の取得を達成したのみならず、今まで培ってきた既成概念を打ち破り、新たな価値観を見出すことに成功した。失敗や挫折こそ多々あったが、それらも含めて充実した留学生活を送ることが出来たと思う。

7. 綿村 遼実 (文化教育学部 人間環境課程) オーストラリア シドニー工科大学

1年間のシドニー工科大学の交換留学期間、前期の半年間はブリッジプログラムによる英語習得コースで、文法から英会話まで英語の基礎を学んだ。授業内容はオーストラリアを題材に取り扱ったもので、アボリジニの歴史やオーストラリアの祭日、職環境など語学と共に現地の歴史や文化についても学ぶ機会が与えられた。さらに並行して後期の学部授業へ進むのに必要 IELTS 試験の対策も授業の中でサポートしてもらいつつ、自主課題として取り組んだ。ブリッジプログラムでは3つの授業が組み込まれており、1つは特に英語の文法やボキャブラリーなどの基礎から四技能まで語学の体系にのみ焦点を絞り、グループでのディスカッションやペア作業を通して英語の正しい使い方を学んだ。残り2つの授業に関しては、英語を媒体として文化的側面に触れるものである。成績評価の判断基準として、毎授業後に課されるレポート課題と授業の総仕上げとしてプログラム後半に課されるプレゼンテーションが主であった。特筆すべき成果として授業中は日本人同士でも常に英語でのみコミュニケーションを図ること、何十回と自分の意見を文章に書きかえ、修正を繰り返すこと、資料を手当たり次第読んで情報収集することで、基本的な語学の四技能はバランスよく底上げできたと実感している。

Ⅲ. 学術研究交流部門

1. 研究者海外派遣の支援

(1) 平成25年度佐賀大学国際研究集会開催支援事業（申請 8 件中 5 件採択）

	氏 名 所 属	開催地	研究集会名	開催期間	参加者	支援金額
1	大渡 啓介 教授 工学系研究科	佐賀大学	The 2nd International Symposium on Host Compounds for Separation and Functionality in Saga	平成25年 7月12日	47	556,469円
2	小島 昌一 准教授 工学系研究科	佐賀大学	日韓国際シンポジウムーグローバル社会における地域環境再生に向けた計画・デザイナー	平成26年 2月28日～ 3月2日	150	1,000,000円
3	片野 俊也 准教授 低平地沿岸 海域研究センター	佐賀大学	International Seminar on Metapopulation Studies on Microalgae in Coastal Waters of East China Sea and Yellow Sea	平成25年11月26日	32	465,132円
4	大串浩一郎 教授 工学系研究科	佐賀大学	2013 Disaster Risk Management Symposium	平成25年12月13日	80	1,000,000円
5	李 海峰 准教授 工学系研究科	佐賀大学	持続可能な都市開発と低炭素都市づくり	平成26年 2月8日～ 2月16日	30	917,309円
					合計	3,938,910円

【成果報告】

1. 大渡 啓介 教授（工学系研究科）“The 2nd International Symposium on Host Compounds for Separation and Functionality in Saga”

ドイツ、オーストラリア、韓国から優秀な研究者を招聘し、このような講演会を開催できたことは有意義であった。工学系研究科長との昼食懇談会の形式で招聘者全員と本学特別講演者3人による表敬訪問を行い、工学系研究科の組織・運営体制や取り組みに関してスライドを利用し林田研究科長から説明がなされた。また、各招聘者の大学の組織・運営体制や取り組みについても簡単に説明をして頂いた。参加者からは、今回の国際シンポジウムについて高い評価を受けた。

共同研究打合せの場で、共同研究推進に関する討議がなされ、具体的な化合物について、原料として用いたいとの打診がなされ、本学で合成し、郵送することになった。これを元に合成する化合物の機能化を評価することで、研究成果を共同研究の成果として公表したいとのことであった。また、本学学生2人が、このシンポジウムに引き続いて韓国の慶州で行われたセミナーに参加し、英語の口頭発表による研究発表を行った。いずれも優れた発表であり、参加者から高い評価を受けた。

2. 小島 昌一 准教授（工学系研究科）「日韓国際シンポジウム—グローバル社会における地域環境再生に向けた計画・デザイン—」

日韓国際シンポジウムを日本建築学会との共催で実施した。シンポジウムは日本語と韓国語の同時通訳により勧められ、日韓の著名な建築家2人による基調講演と3人のパネラーによるパネルディスカッションが行われ、建築物を生かした都市計画やまちづくりの在り方について意見交換が行われた。グローバルな視点で議論されたが、地域にとっても刺激になる手がかりが得られた。日本語を話せる外国人またはシンポジウム全体が英語によって行われることが多かったが、今回は日本語・韓国語の同時通訳だったので、現在韓国で活躍している建築家や研究者の意見を多くの日本人がじかに聞いたことは大変有意義であった。

3. 片野 俊也 准教授（低平地沿岸海域研究センター）“International Seminar on Metapopulation studies on Microalgae in Coastal water of East China Sea and Yellow Sea”

東シナ海、黄海周辺海域における、微細藻類に関して非常に広い研究範囲について、研究成果・意見の交換を行うことができた。この研究集会をきっかけとして今後2年に1度、日本、韓国、中国でセミナーを今後も継続していくことが決定された。

4. 大串 浩一郎 教授（工学系研究科）“2013 Disaster Risk Management Symposium”

防災・減災に関する我が国研究の第一人者である河田恵昭関西大学教授と関東大震災を後世に伝える東京都消防庁消防博物館館長の宍戸洋平氏を迎え、また、中国、韓国、台湾などからのリスクマネジメントに係る多数の研究者の参加を得て、学際的、国際的なディスカッションが本学でなされたことは特筆に値する。また、昨年5月に本学で開催した「ストップ・ザ雑魚寝シンポジウム」でテーマとなった避難所に避難する人びとの健康まで考慮したさまざまな取り組みの展示や体験コーナー実施も注目される。さらに地域で防災・減災に関心が高い市民やNPO、行政などからも出席があり、地域の今後の防災・減災を考えていく上で本シンポジウムは高く評価される。

(2) 平成25年度佐賀大学研究者海外派遣事業（申請11件中11件採択）

	氏名 所属	国名	海外派遣機関名	派遣機関	支援金額
1	柴 錦春 教授 工学系研究科	中国	上海交通大学	平成26年2月17日～ 3年28日	694,147円
2	三島 伸雄 教授 工学系研究科	インドネシア タイ	サムラトゥランギ大学 タマサート大学	平成25年9月5日～ 9月17日	300,000円
3	後藤隆太郎 准教授 工学系研究科	インドネシア タイ	ラムラドゥランギ大学 タマサート大学	平成25年9月5日～ 9月19日	300,000円
4	田口 陽子 講師 工学系研究科	インドネシア タイ	ラムラドゥランギ大学 タマサート大学	平成25年9月5日～ 9月19日	300,000円
5	川喜田英孝 准教授 工学系研究科	アメリカ	カリフォルニア大学	平成25年4月1日～ 3月31日	1,000,000円
6	成田 貴行 准教授 工学系研究科	アメリカ カナダ	ペンシルベニア州立大学 ウィルフリッド ロリエ大学	平成25年9月2日～ 9月12日	400,000円

7	野瀬 昭博 教授 農学部	ベトナム	アンザン大学 ノンラム大学 在ホーチミン日本領事館	平成25年8月4日～ 8月14日	269,125円
8	鄭 紹輝 准教授 農学部	ベトナム	アンザン大学 ノンラム大学 在ホーチミン日本領事館	平成25年8月4日～ 8月14日	269,125円
9	辻 一成 准教授 農学部	ベトナム	アンザン大学 ノンラム大学 在ホーチミン日本領事館	平成25年8月4日～ 8月14日	269,125円
10	山津 幸司 准教授 文化教育学部	ベルギー 台湾	ゲント大学 国立台湾大学	平成26年2月1日～ 3年24日	880,560円
11	小島 研介 准教授 医学部	アメリカ	MD アンダーソンがんセンター	平成25年12月3日～ 12月19日	399,899円
				合 計	5,081,981円

【成果報告】

1. 柴 錦春 教授（工学系研究科）「有明粘土と上海粘土の工学的性質における堆積環境の影響に関する研究」

約1ヶ月間、上海交通大学の沈水龍教授のグループとの交流・共同研究によって、有明粘土と上海粘土の性質の違う一番重要な原因は堆積環境の違うことである。従って、地盤工学の技術者にとって、地質・堆積環境に関する知識は重要である。この点を今後の教育に反映したい。しかし、申請書に上げた目標：地盤工学的性質に及ぼす堆積環境の影響を考慮可能な評価指標の提案、堆積環境の影響を考慮した軟弱地盤改良技術の開発について、また未完成であり、これからも続けて研究を行う。

2. 三島 伸雄 教授（工学系研究科）「アジアのコースタル・コミュニティ・ゾーンにおける災害時安全避難管理に関する研究」

本研究では、多様性と地域性に富むアジアのコースタル・コミュニティ・ゾーンの災害時の安全避難管理の現状を調査・評価し、その豊かな空間性との共存の中で有効な災害危険度低減に関する提言を行うことを全体構想としている。今回は、そのための研究者同士の交流および意見交換、ならびに対象地とする地区の詳細な調査を行うことを目的とし、今後の各種申請に向けた準備を行うことを目標とした。今回の海外派遣は、そのスタートを具体化する上で十分な成果を得ることが出来たと自己評価している。

3. 後藤 隆太郎 准教授（工学系研究科）「アジアのコースタル・コミュニティ・ゾーンにおける災害時安全避難管理に関する研究」

インドネシア・マナド市内沿岸部における都市沿岸部の広場（Open space with urban living activity）の空間構成・利用実態を調査し、当該広場の成立経緯を把握することができた。また、インドネシアミナハサ地域のトモホン市およびマナド市の市街地中心部や歴史的な居住地区に残存するオランダ植民地時代のコロニアルハウス、教会建築について建物調査およびヒアリング調査を行い、異文化の計画技術を用いつつ現地生活様式や気候風土に適用した外部空間を含む空間計画の実態を把握できた。加えて、共同研究者である三島伸雄教授、田口陽子講師らのバンティーク族の集住地の生活空間実態調査に参加し情報共有を行うことができた。

4. **田口 陽子** 講師 (工学系研究科) 「アジアのコースタル・コミュニティ・ゾーンにおける災害時安全避難管理に関する研究」

住宅29軒のテラス空間まわりについて平面図・断面図等を作成し、使い方に関するヒアリング調査とともにその実態を詳細に調査することができた。そのほか、インドネシア・トモホン市の郊外・中心部に残存するオランダ植民地時代のコロニアルハウスについて建物調査およびヒアリング調査を行った。調査したコロニアルハウスは1930年代にインドネシア人の富裕層により建設されたもので、現地の生活様式や気候風土に適用した平面形式をもつ歴史的建物であることが確認できた。

5. **川喜田 英孝** 准教授 (工学系研究科) 「ゲルや流体中の分子やコロイドの拡散や対流による移動現象の解明」

カリフォルニア大学デービス校教授の Ronald Phillips 教授は、高分子溶液中の移動現象について研究を行っている。派遣者は高分子溶液などの高粘性流体を用いたコロイドや分子の分離の研究を行っているために、特にその化学工学現象の理解を目的として渡米した。2週間に1度共に研究成果について討論を行った。また新たに研究室で行い、その結果についても討論を行った。各国から集まって来たPDやサバティカルの研究者と、自身の研究についてあるいは各々の国での研究の状況について話しができたのは収穫であった。

6. **成田 貴行** 准教授 (工学系研究科) 「微粒子の高機能化に関する共同研究」

世界的権威である教授と共同研究を行えることで、充実した機材を利用でき、質の高いディスカッションさせて頂く機会を得られるチャンスが広がった。Wilfrid Laurier University (学部間協定校) では Masoud Jelokhani-Niaraki 教授の元でリポソーム上での膜タンパク質構築法について指導を受け、期待できるテーマを発掘できた。今後、学生を派遣する形を作り、分野の壁を越えて共同研究をしてゆくことを了承して頂いた。また、は同学科の Vladimir Kitaev 先生にも接面し、共同研究の可能性を模索した。

7. **野瀬 昭博** 教授 (農学部) “Conservation of food crop resource and development in rice varieties production in An Giang province, Vietnam”

アンザン大学でのシンポジウムとワークショップにおいて提供したイネ病害抵抗性、塩類集積土壌のファイトリメデーション、CDM事業活用による環境改善に対し高い感心が寄せられ、メコンデルタ地域での活用の可能性と必要性の高さを実感として知ることができた。同時に、今後、佐賀大学の実績をメコンデルタ地域の農業教育と活性化に活用できる可能性と課題を知ることができ、期待以上の成果が得られた。

8. **鄭 紹輝** 准教授 (農学部) “Conservation of food crop resource and development in rice varieties production in An Giang province, Vietnam”

アンザン大学での国際シンポにおいて、“SOYBEAN PRODUCTION AND IMPROVEMENT FOR TROPICAL AREA (熱帯地域におけるダイズの栽培改良)”と題した講演を行った。アンザン省はベトナム南部のメコンデルタに位置し、従来より稲の大産地である。しかし、近年稲の供給過剰や、乾季における水問題などから、畑作の必要性が検討され、中にはもっぱら輸入に頼っているダイズの栽培が注目されている。本講演はベトナムにおけるダイズ栽培普及には有益な情報を提供したものになる。また、ベトナム側からの報告ではメコンデルタ農業

と地域社会のいっそうの開発に向けた技術的・政策的課題が明らかにされた。これは当初の目的・目標を十分に達成できる内容であった。

9. 辻 一成 准教授（農学部）“Conservation of food crop resource and development in rice varieties production in An Giang province, Vietnam”

約100人の参加者があったアンザン大学での国際シンポにおける佐賀大学側からの各報告は大いに関心もたれた。また、ベトナム側からの報告ではメコンデルタ農業と地域社会のいっそうの開発に向けた技術的・政策的課題が明らかにされた。これは当初の目的・目標を十分に達成できる内容であった。現地の日系米穀卸売企業の訪問では、TPPを睨んだメコンデルタにおける日本米生産の競争激化の可能性が強まっていることなど新しい動向を掴むことができ、期待どおりの成果が得られた。

10. 山津 幸司 准教授（文化教育学部）「身体活動促進と身体不活動減少を中心に発展する健康長寿研究拠点の構築」

最大の成果は、IPENと連携し研究を進めていくことの承諾いただいたこと、20人超のポスドク・博士学生を育成し研究成果を量産するための指導法（定期的な個別及び全体ミーティング）を見学できたことである。また、国立台湾大学公衆衛生学部の黄准教授（米国ハーバード大学出身）を訪問し、我々の研究成果を英文化していく際の助言や協力体制を今後整備いただくこととなった。今回の連携を生かし、国際共同研究推進と英語での研究業績の発信を加速させたい。

11. 小島 研介 准教授（医学部）「経路を分子標的とした新たな造血器腫瘍治療法の開発」

National Cancer Institute (NCI) がサポートする Leukemia SPORE、Lymphoma SPORE の研究者会議に出席し、多施設の研究者との研究打ち合わせを行うとともに、活発な議論に参加した。米国血液学会年次集会では、SPORE 研究にかかわる自身の研究発表を含め、計7本（講演3本、ポスター4本）の発表にかかわり、また、講演セッションの座長も務め、米国血液学会年次集会の学会運営に貢献した。米国 MD Anderson Cancer Center では、Leukemia SPORE、Lymphoma SPORE にかかわる研究の発展、遂行のため、MD Anderson Cancer Center 白血病科内外の多くの研究者との研究打合せをおこなうのみならず、研究スタッフ、テクニシヤンの技術指導もおこなった。

IV. 地域国際連携室

1. 平成25年度産学官国際交流セミナー

毎年開催している産学官国際交流セミナーを本年も実施した。個別面談及び母国紹介ともに盛況であった。参加企業16社、参加人数140数人を得て、成功裡に終了した。

【日 時】平成25年7月24日13:00-15:30

【場 所】佐賀大学理工学部6号館1階大講義室および2階多目的セミナー室

次第：

1. 主催者挨拶（佐賀地域留学生等交流推進協議会会長、佐賀大学長：佛淵孝夫
2. 佐賀県商工会議所連合会 専務理事：島内正彦
佐賀県

第1部

佐賀大学の産学官連携国際交流の取り組み事例紹介、
地域イノベーション創出拠点を目指して：産学・地域連携機構（講師）松前あかね
グローバル人材活用の優良事例紹介
100年宣言：株式会社安永（代表取締役社長）安永正
留学生の就職体験談・活動紹介
清本鐵工株式会社 蔣 建木梁
株式会社キザクラ 叶 莉

第2部

出展企業の個別面談、留学生の母国紹介



佛淵学長による挨拶



全体セミナー



企業面談



各ブースにて母国の紹介

2. 留学生対象就職支援講演会

国際交流推進センターが主催し、九州グローバル産業人材協議会との共催により、留学生を対象とした就職支援講演会を開催した。受講対象はすべての留学生とし、特に全員日本企業に就職を希望する学生に呼びかけを行った。企業関連の参加も多く見られ、留学生は個別相談ブースにおいて熱心に質問をしていた。本格的な就職活動を前に、企業が留学生に期待していることを知り、自己分析や模擬面接を通して、正しい就活準備の進め方を学ぶことができたものとする。本事業は全国中小企業団体中央会補助事業（地域中小企業の海外人材確保・定着支援事業）の採択を受けて実施した。

【日時】 平成25年12月9日（月）12：00～15：00

【場所】 理工6号館1階106教室

【内容】 九州グローバル産業人材協議会派遣講師による講演「留学生のための就活ガイダンス」

オリエンテーション

就職活動の流れを知る

中小企業の良さ

今しておくべきこと

長所・自己PRについて

個別相談（エントリーシートの書き方等）



講師による講演



個別面談会

資料1：学長・理事表敬訪問及び学術交流

○平成25年4月24日 学長表敬

来訪者：米国大使館 広報・文化交流担当公使 Mark・J・Davidson 氏

在福岡アメリカ領事館 広報担当領事 Michael Chadwick 氏

概要：佐賀大学附属図書館へのアメリカンシェルフの設置及び図書の寄贈のための訪問



○平成25年5月20日 理事表敬

来訪者：義守大学（台湾）副学長 Dr. Yung-Sheng Huang

国際事務処長 Dr. Yung-Chung Wei

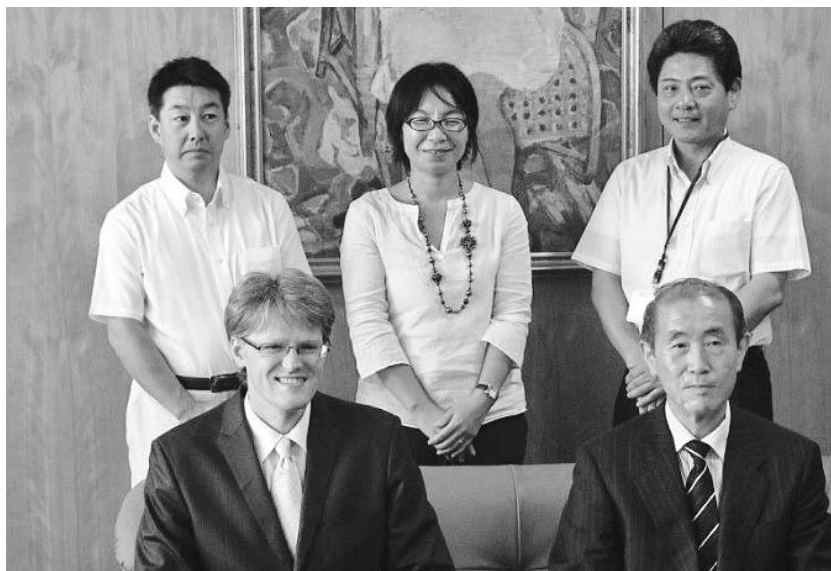
概要：国際交流に関する意見交換



○平成25年7月12日 理事表敬

来訪者：ヴィタウタス・マグヌス大学（リトアニア）アジア研究所長 Dr. Aurelijus Zykas

内 容：サマープログラムでの講義及び学術交流協定についての意見交換



○平成25年7月12日 理事表敬

来訪者：香港中文大学（香港）Lim Taiwei（林大偉）日本研究学科 准教授

Choi Winkki（蔡穎心）日本研究学科 講師

学生10人

内 容：佐賀大学・香港中文大学サマーキャンプに参加のため



○平成25年7月22日 理事表敬

スリッパリーロック大学（米国）Dr. Eva Tsuquiashi-Daddesio 人文学部長

Dr. Ana Maria Caula 言語学科長

Ms. Yukako Ishimaru 日本語教員

内 容：国際交流に関する意見交換



○平成26年1月14日 理事表敬

来訪者：元培科技大学（台湾）理事 Prof. Tsai, Ya-Hsien

教員10人、学生11人

内 容：国際交流に関する意見交換のため



○平成26年 2月 4日 学長表敬

来訪者：在福岡米

国領事館領事・広報担当領事マーガレット・マックロード氏

内 容：着任挨拶のため



○平成26年 2月27日 学長表敬

ベトナム・アンザン省主席副知事 Huynh The Nang 氏

アンザン大学副学長 Vo Van Thang 氏

内 容：佐賀大学で開催される国際シンポジウムに出席のため



資料2：国際交流推進センター事業関連の海外出張・訪問

期間	行先（国）	訪問先	用件	出張者名
平成25年 4月18日～19日	中国	香港中文大学	学生交流プログラムに関する打ち合わせ	藤田 清士 教授 山田 直子 准教授 吉川 達 講師
平成25年 8月11日～15日	韓国	キョンヒ大学 国立教育院	物理講義及び打ち合わせ	藤田 清士 教授
平成25年 8月21日～23日	韓国	国民大学校	表敬訪問及び佐賀大学校友の集い IN ソウル	木村 政治 事務員
平成25年 8月23日～29日	アメリカ	パシフィック大学	語学研修引率	コールマン サウス 准教授
平成25年 9月8日～12日	アメリカ	スリッパリーロック 大学	研修及び事務交流	木下翔太郎 事務員
平成25年 9月10日～13日	中国	北京工業大学 華東師範大学	国際交流にかかわる協議	山田 直子 准教授
平成25年 9月22日～25日	中国	浙江理工大学 浙江科技大学 浙江大学生学院	国際交流にかかわる協議	外尾 一則 副センター長 山田 直子 准教授
平成26年 2月22日～26日	中国	浙江理工大学	浙江理工大学春季プログラム参加 及び引率	副島加代子 係長
平成26年 2月23日～28日	インドネシア	ジャカルタ国立大学 ブラビジャヤ大学 マラン国立大学	新規海外派遣プログラム立ち上げ について協定校との協議	山田 直子 准教授 布尾勝一郎 准教授
平成26年 2月23日～ 3月4日	中国	香港中文大学	香港中文大学引率	吉川 達 講師
平成26年 3月6日～10日	韓国	釜慶大学校 大邱大学校	釜慶大学校・佐賀大学学生交流プ ログラム	山田 直子 准教授
平成26年 3月7日～12日	ニュージーランド	オークランド大学	オークランド大学 ELA 下見、 学生引率	山田佳奈美 コーディネーター
平成26年 3月13日～16日	中国	浙江理工大学 浙江大学生学院	浙江理工大学訪問、浙江大学生学 院訪問、上海セミナー	山田 直子 准教授
平成26年 3月14日～17日	中国	浙江理工大学	上海セミナー、学生引率	木村 政治 事務員

資料3：平成25年度 留学生数

平25. 5. 1現在

学部等 Faculties	学部 Undergraduates					大学院 Graduate Schools			
	文化教育学部 Faculty of Culture and Education	経済学部 Economics	医学部 Medicine	理工学部 Science and Engineering	農学部 Agriculture	修士課程（博士前期） Master's Course			
						教育学研究科 Education	経済学研究科 Economics	医学系研究科 Medicine	工学系研究科 Graduate School of Science and Engineering
国名 Countries									
ネパール連邦民主共和国 Federal Democratic Republic of Nepal									
バングラデシュ人民共和国 People's Republic of Bangladesh									
スリランカ民主社会主義共和国 Democratic Socialist Republic of Sri Lanka							1		
タイ王国 Kingdom of Thailand									
マレーシア Malaysia	1	1		17					
インドネシア共和国 Republic of Indonesia									
大韓民国 Republic of Korea	1	1		3		1			
モンゴル国 Mongolia		1							
ベトナム社会主義共和国 Socialist Republic of Viet Nam	6					3			
中華人民共和国 People's Republic of China	8	23		9	3	12	12	4	9
カンボジア王国 Kingdom of Cambodia							1		
台湾 Taiwan			1						
イラン・イスラム共和国 Islamic Republic of Iran									
エジプト・アラブ共和国 Arab Republic of Egypt						1			
ウガンダ共和国 Republic of Uganda									
アメリカ合衆国 United States of America						1			
フランス共和国 French Republic									
リトアニア共和国 Republic of Lithuania									
計 Total	16	26	1	29	3	18	14	4	9

国名 Countries	大学院 Graduate Schools						鹿児島大学 大学院連合 農学研究科 United Graduate School of Agricultural Kagoshima University	研究生 科目等 履修生 特別聴講 学生 Research Part-Time Students Special Audit	日本語・ 日本文化 研修生 Intensive Japanese	合計 Total
	学部等 Faculties									
	修士課程 (博士前期) Master's Course	博士課程 Doctoral Course	博士後期 Doctoral Course	特別コース 博士前期／修士 PSJP Course Master's		特別コース 博士後期 PSJP Course Doctoral				
農学研究科 Agriculture	医学系研究科 Medicine	工学系研究科 Graduate School of Science and Engineering	工学系研究科 Graduate School of Science and Engineering	農学研究科 Agriculture	工学系研究科 Graduate School of Science and Engineering					
ネパール連邦民主共和国 Federal Democratic Republic of Nepal			1			1				2
バングラデシュ人民共和国 People's Republic of Bangladesh	1		1		1	4	4			11
スリランカ民主社会主義共和国 Democratic Socialist Republic of Sri Lanka			1			2	3			7
タイ王国 Kingdom of Thailand				1	1	4		5		11
マレーシア Malaysia			4							24
インドネシア共和国 Republic of Indonesia	1	1	7	3	1	5	4			22
大韓民国 Republic of Korea	1		1					9		16
モンゴル国 Mongolia										1
ベトナム社会主義共和国 Socialist Republic of Viet Nam			2					3		14
中華人民共和国 People's Republic of China	1	3	15			3	2	32		136
カンボジア王国 Kingdom of Cambodia										1
台湾 Taiwan								7		8
イラン・イスラム共和国 Islamic Republic of Iran						1				1
エジプト・アラブ共和国 Arab Republic of Egypt										1
ウガンダ共和国 Republic of Uganda							1			1
アメリカ合衆国 United States of America								1		2
フランス共和国 French Republic								2		2
リトアニア共和国 Republic of Lithuania								1		1
計 Total	4	4	32	4	3	20	14	60	0	261

No.	国名	大学名	国公私等
1	大韓民国	全南大学校	国立
2		安東大学校	国立
3		国民大学校	私立
4		釜山大学校	国立
5		木浦大学校	国立
6		釜慶大学校	国立
7		済州大学校	国立
8		韓国技術教育大学	国立
9		光州女子大学校	私立
10		培材大学校	私立
11		牧園大学校	私立
12		大邱大学校	私立
13	中華人民共和国	華東師範大学	国立
14		北京工業大学	国立
15		首都師範大学	国立
16		中国農業大学	国立
17		遼寧師範大学	国立
18		ハルビン工業大学	国立
19		華東理工大学	国立
20		浙江理工大学	国立
21		西南政法大学	国立
22		浙江科技大学	国立
23	遼寧大学	公立	
24	台湾	輔仁カトリック大学	私立
25		国立政治大学	国立
26		国立中興大学	国立
27		国立台北大学	国立
28		国立東華大学	国立
29		元培科技大学	私立
30		国立連合大学	国立
31		文藻外語大学	私立
32	ベトナム	ベトナム国家農業大学	国立
33		ノンラム大学	国立
34		ベトナム国家大学ハノイ外国語大学	国立
35		ビン大学	国立
36		ベトナム国家大学ハノイ校自然科学大学	国立
37		ベトナム国家大学ハノイ校工科大学	国立
38		アンザン大学	国立
39	カンボジア	プノンベン王立法経大学	国立
40		王立農業大学	国立
41		王立プノンベン大学	国立

42	ラオス人民民主共和国	ラオス国立大学	国立
43	タイ王国	カセサート大学	国立
44		コンケン大学	国立
45		チェンマイ大学	国立
46		アジア工科大学	国立
47		モンクット王カラバン工科大学	国立
48		タマサート大学	国立
49		インドネシア共和国	ハサヌディン大学
50	ガジャマダ大学		国立
51	サム ラツランギ大学		国立
52	リアウ イスラム大学		私立
53	スリビジャヤ大学		国立
54	ダルマプルサダ大学		私立
55	セベラスマレット大学		国立
56	ジュアンダ大学		私立
57	マラン国立大学		国立
58	ボゴール農業大学		国立
59	ジャカルタ国立大学	国立	
60	バングラデシュ人民共和国	バングラデシュ工科大学	国立
61		ラジャヒ大学	国立
62		バングラデシュ農科大学	国立
63		ジャハンギールナガール大学	国立
64		チッタゴン工科大学	国立
65		ダッカ工科大学	国立
66	スリランカ民主社会主義共和国	ペラデニア大学	国立
67	パキスタン・イスラム共和国	コハート科学技術大学	国立
68		ペシャワール大学	国立
69	英国	グラスゴー大学	国立
70	ルーマニア	アレクサンドルイオンクザ大学	国立
71	フランス共和国	ブルゴーニュ大学	国立
72		オルレアン大学	国立
73	ポーランド共和国	ルブリン工科大学	国立
74	リトアニア共和国	ヴィタウタス・マグヌス大学	国立
75	アメリカ合衆国	アンダーソン大学	私立
76		カリフォルニア大学デイビス校	州立
77		パシフィック大学	私立
78		スリッパリーロック大学	州立
79	カナダ	マニトバ大学	国立
80		ウィルフリッド・ロリエ大学	国立
81	オーストラリア連邦	ラトローブ大学	国立
82		シドニー工科大学	国立
83	フィンランド共和国	ユバスキュラ大学	国立

資料5：平成25年度 国際交流推進センター関連行事

H25	佐賀大学生の派遣・教育・支援	留学生に対する教育・支援	国際交流推進事業
4月		2日 新入留学生オリエンテーション 3日 2013年度 SPACE 入学式 4日 日本語コースプレースメントテスト 5日 日本語コースオリエンテーション 20日 新入留学生研修旅行（～21日 嬉野市） 27日 留学生フィールドワーク（福岡市・大宰府市）	24日 在日米国大使館公使・在福岡米国領事館領事 学長表敬訪問 25日 第1回国際交流推進センター運営委員会
5月	8日 留学フェア2013	10日 新入留学生歓迎会 22日 留学生健康診断（～23日）	20日 義守大学（台湾）理事表敬訪問 24日 第2回国際交流推進センター運営委員会
6月		3日 消防訓練（国際交流会館） 8日 鹿島高校と留学生の交流会、鹿島市ホームステイ、鹿島ガタリンピック参加（～9日）	24日 佐賀地域留学生等交流推進協議会第1回運営委員会 25日 第3回国際交流推進センター運営委員会
7月	9日 佐賀大学サマープログラム（～25日） 佐賀大学・香港中文大学サマーキャンプ（～16日）	6日 外国人留学生フィールドワーク（鳥栖、朝倉市）	5日 国立大学法人留学生センター留学生指導担当研究協議会 12日 ヴィタウタスマグナス大学（リトアニア）理事表敬訪問 香港中文大学（香港）理事表敬訪問 22日 スリップバリーロック大学（アメリカ）理事表敬訪問 24日 産学官国際交流セミナー 佐賀地域留学生等交流推進協議会総会
8月	23日 パシフィック大学 研修派遣（～9月22日）	4日 栄の国まつり参加 19日 SPACE、日本語・日本文化研修プログラム修了式	2日 第4回国際交流推進センター運営委員会 8日 第5回国際交流推進センター運営委員会（メール会議） 21日 第6回国際交流推進センター運営委員会
9月		26日 日本語コースプレースメントテスト 27日 SPACE-E、日本語コースオリエンテーション 30日 SPACE-J オリエンテーション	19日 第7回国際交流推進センター運営委員会
10月	16日 海外留学成果報告会	2日 SPACE、日本語・日本文化研修プログラム入学式 9日 新入留学生オリエンテーション 19日 新入留学生研修旅行（～20日 嬉野市） 23日 新入留学生健康診断（～24日）	17日 第8回国際交流推進センター運営委員会（メール会議） 30日 第9回国際交流推進センター運営委員会
11月		10日 佐賀地域外国人留学生援助会主催スタンプラリー（吉野ヶ里） 16日 SPACE-J・日研生 フィールドワーク（福岡市・大宰府市） 30日 SPACE-E フィールドワーク（熊本市）	15日 日本語・日本文化研修留学生問題に関する検討会議 29日 第10回国際交流推進センター運営委員会
12月	2日 佐賀大学基金奨学金受給決定通知書授与式	9日 留学生のための就職支援講演会 14日 被爆体験講話	10日 第11回国際交流推進センター運営委員会（メール会議） 12日 国際交流活動対応支援セミナー 25日 第12回国際交流推進センター運営委員会
H26 1月			14日 元培科技大学（台湾）理事表敬訪問 27日 第13回国際交流推進センター運営委員会 30日 国立大学法等国際企画担当責任者連絡協議会
2月	14日 モナシユ大学（オーストラリア）研修派遣（～3月17日） 22日 浙江理工大学（中国）研修派遣（～3月17日） 23日 香港中文大学研修派遣（～3月4日） 28日 大邱大学校（韓国）研修派遣（～3月29日）	8日 SPACE-E フィールドワーク（小城市） 14日 SPACE プログラム、日本語・日本文化研修プログラム修了式	4日 在福岡米国領事館領事学長表敬訪問 24日 第14回国際交流推進センター運営委員会 27日 アンザン省・アンザン大学（ベトナム）学寮表敬訪問
3月	7日 オークランド大学（ニュージーランド）研修派遣（～30日）		15日 佐賀大学 上海セミナー 31日 第15回国際交流推進センター運営委員会

資料6：国際交流推進センター規則

(平成23年9月28日制定)

(趣旨)

第1条 この規則は、国立大学法人佐賀大学基本規則（平成16年4月1日制定）第11条の7第2項の規定に基づき、国立大学法人佐賀大学国際交流推進センター（以下「センター」という。）の組織及び運営に関し、必要な事項を定めるものとする。

(目的)

第2条 センターは、国立大学法人佐賀大学（以下「本学」という。）の部局及び地域社会と連携し一体となって、海外の教育研究機関との国際交流の進展に寄与することを目的とする。

(室及び部門並びに業務)

第3条 センターに、前条に掲げる目的を達成するため、国際交流企画推進室及び地域国際連携室並びに学生交流部門及び学術研究交流部門を置く。

2 国際交流企画推進室は、次に掲げる業務を行う。

- (1) 国際戦略構想に基づく国際交流事業の企画推進に関すること。
- (2) 本学が海外に置くサテライトの整備、活用の施策・立案・実施に関すること。
- (3) 重点交流大学の選定に関すること。
- (4) 海外教育研究機関等との学術交流の協定及び学生交流の協定締結に関すること。
- (5) 国際交流の危機管理体制の整備に関すること。
- (6) 国際交流機関との連携に関すること。
- (7) 国際広報に関すること。
- (8) 卒業又は修了した留学生のネットワークの構築に関すること。
- (9) 海外教育研究機関等の情報収集及びコーディネート業務に関すること。
- (10) その他国際交流に関すること。

3 地域国際連携室は、次に掲げる業務を行う。

- (1) 地域社会及び産業界との国際交流推進のための連携・協力に関すること。
- (2) 佐賀県、市町村、産業界、各種団体等と連携した国際交流事業の企画・立案・実施に関すること。
- (3) 地域連携の国際ワークショップ等の企画・立案・実施に関すること。
- (4) 地域社会、産業界、各種団体と連携した留学生の奨学基金事業の実施に関すること。
- (5) 留学生の企業等のインターンシップ受入先の開拓に関すること。
- (6) 留学生の就職活動支援に関すること。
- (7) 地域社会と連携した留学生の支援に関すること。
- (8) 佐賀地域留学生等交流推進協議会の運営に関すること。
- (9) 留学生、地域社会、産業界及び各種団体とのコーディネート業務に関すること。
- (10) 地域への広報に関すること。
- (11) その他地域国際連携に関すること。

4 学生交流部門は、次に掲げる業務を行う。

- (1) 留学生受入れプログラムの開発支援に関すること。

- (2) 奨学金、宿舍等の留学生受入環境及び学生派遣環境の整備に関する事。
- (3) 重点交流大学とのジョイントプログラムの企画推進に関する事。
- (4) 国際教育プログラムの実施支援に関する事。
- (5) 海外教育研究機関等との学生交流の協定締結支援に関する事。
- (6) 留学生の生活指導及び相談に関する事。
- (7) 学生の派遣先の情報収集及び開拓に関する事。
- (8) 留学生の渡日時及び渡日後の在留手続支援業務に関する事。
- (9) 留学生の受入業務及び学生の派遣業務に関する事。
- (10) 派遣学生の査証取得等の在留手続支援業務に関する事。
- (11) 外国人留学生宿舍の管理運営に関する事。
- (12) その他学生交流に関する事。

5 学術研究交流部門は、次に掲げる業務を行う。

- (1) 海外教育研究機関等との共同研究の促進に関する事。
- (2) 海外教育研究機関等との学術交流協定の締結支援に関する事。
- (3) 研究成果等の国際社会への情報発信に関する事。
- (4) 国際シンポジウム、国際セミナー等の企画・立案・実施に関する事。
- (5) 国際研究ネットワークの整備に関する事。
- (6) 研究者の渡日時及び渡日後の在留手続支援業務に関する事。
- (7) 研究者の受入業務及び派遣業務に関する事。
- (8) 派遣研究者の査証取得等の在留手続支援業務に関する事。
- (9) 外国人研究者宿舍の管理運営に関する事。
- (10) その他学術研究交流に関する事。

(鍋島サテライト)

第4条 センターに、鍋島地区における国際交流業務を遂行するため m 鍋島サテライトを置く。

2 鍋島サテライトの業務に関し、必要な事項は、別に定める。

(職員)

第5条 センターに、次の職員を置く。

- (1) センター長
- (2) 副センター長
- (3) 鍋島サテライト長
- (4) 室長及び部門長
- (5) 専任の教員
- (6) 併任の教員
- (7) 契約コーディネーター
- (8) その他必要な職員

(センター長)

第6条 センター長は、理事のうち学長が指名した者をもって充てる。

2 センター長は、本学の国際交流事業を統括する。

3 センター長の任期は、当該理事の任期とし、再任を妨げない。

(副センター長)

第7条 副センター長は、本学の専任の教授のうちからセンター長が指名した者をもって充てる。

2 副センター長は、センター長を補佐し、センターの業務を掌理する。

3 副センター長の任期は、2年とし、再任を妨げない。

4 副センター長に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(鍋島サテライト長)

第8条 鍋島サテライト長は、本学の専任の教授のうちからセンター長が指名した者をもって充てる。

2 鍋島サテライト長は、センター長及び副センター長を補佐し、鍋島サテライトの業務を掌理する。

3 鍋島サテライト長の任期は、2年とし、再任を妨げない。

4 鍋島サテライト長に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(室長及び部門長)

第9条 室長及び部門長は、センターの専任の教員又は併任の教員のうちから、センター長が指名した者をもって充てる。

2 室長及び部門長は、室及び部門の業務を掌理する。

3 室長及び部門長の任期は、2年とし、再任を妨げない。

4 室長及び部門長に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(国際コーディネーター)

第10条 センターに、国際コーディネーターを置き、センターの専任の教員及び契約コーディネーターをもって充てる。

2 国際コーディネーターは、センター長及び副センター長を補佐し、センターの業務を横断的かつ包括的に処理する。

(専任の教員及び契約コーディネーターの選考)

第11条 専任の教員及び契約コーディネーターの選考は、第14条に定める運営委員会の議を経て、学長が行う。

(併任の教員)

第12条 併任の教員は、センター長及び部局長の推薦に基づき、運営委員会の議を経て、学長が任命する。

2 併任の教員は、室及び部門に配置し、国際コーディネーターと協働して、室及び部門の業務を処理する。

3 併任の教員の任期は、2年とし、再任を妨げない。

(国際マネージャー)

第13条 センターに、国際マネージャーを置き、学術研究協力部国際課長をもって充てる。

2 国際マネージャーは、国際コーディネーター並びに室及び部門との調整を図る。

(運営委員会)

第14条 センターに、国立大学法人佐賀大学国際交流推進センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）

を置く。

2 運営委員会は、次に掲げる事項を審議する。

- (1) センターの管理運営の基本方針に関する事項
- (2) センターの人事に関する事項
- (3) 本学の国際化に係る具体的施策の策定及び実施に関する事項
- (4) センターの予算及び決算に関する事項
- (5) 室及び部門での企画・立案に関する事項
- (6) その他センターの管理運営に関する重要事項

(組織)

第15条 運営委員会は、次に掲げる委員をもって組織する。

- (1) センター長
 - (2) 副センター長
 - (3) 鍋島サテライト長
 - (4) 室長及び部門長
 - (5) 専任の教員（国際コーディネーター）
 - (6) 各学部（理工学部を除く。）から選出された教員 各1人
 - (7) 工学系研究科から選出された教員 1人
 - (8) 全学教育機構から選出された教員 1人
 - (9) 教養教育運営機構から選出された教員 1人
 - (10) 留学生センターから選出された教員 若干人
 - (11) 契約コーディネーター（国際コーディネーター）
 - (12) 学術研究協力部国際課長（国際マネージャー）
- 2 前項第6号から第10号の委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。
- 3 第1項第6号から第10号に掲げる委員に欠員が生じた場合の補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(議長)

第16条 運営委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

- 2 委員長は、運営委員会を招集し、その議長となる。
- 3 委員長に事故があるときは、副センター長がその職務を代行する。

(議事)

第17条 運営委員会は、委員の過半数が出席しなければ、議事を開き、議決をすることができない。

- 2 運営委員会の議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。ただし、教員の人事に関する事項及び特に重要な事項については、出席した委員の3分の2以上の賛成を必要とする。

(専門委員会)

第18条 運営委員会に、専門的事項を審議するために、必要に応じて、専門委員会を置くことができる。

(意見の聴取)

第19条 運営委員会は、必要に応じて、委員以外の者の出席を求め、意見を聴くことができる。

(事務)

第20条 センター及び運営委員会の事務は、学術研究協力部国際課が行う。

(雑則)

第21条 この規則に定めるもののほか、センターに関し、必要な事項については、運営委員会の議を経て、センター長が定める。

附 則

- 1 この規則は、平成23年10月1日から施行する。
- 2 国立大学法人佐賀大学国際貢献推進室設置規則（平成16年5月18日制定）は、廃止する。
- 3 この規則施行後、最初に任命される第7条の副センター長及び第8条の鍋島サテライト長並びに第9条の室長及び部門長の任期は、第7条第3項、第8条第3項及び第9条第3項の規定にかかわらず、平成25年3月31日までとする。
- 4 この規則施行後、最初に任命される第12条の併任の教員の任期は、同条第3項の規定にかかわらず、平成25年3月31日までとする。
- 5 この規則施行後、最初に任命される第15条第1項第6号から第10号までの委員の任期は、同条第2項の規定にかかわらず、平成25年3月31日までとする。

国際交流推進センター長 中島 晃 理事
国際交流推進副センター長 外尾 一則 教授
国際コーディネーター 藤田 清士 教授
国際コーディネーター 山田 直子 准教授
国際コーディネーター 山田佳奈美

国際交流推進センター運営委員会委員

青木 洋介 教授・鍋島サテライト長
新井 康平 教授・地域国際連携室長
小野 浩司 教授（文化教育学部）
中西 一 教授（経済学部）
熊本 栄一 教授（医学部）
村松 和弘 教授（工学系研究科）
濱 洋一郎 教授（農学部）
早瀬 博範 教授（全学教育機構）
古賀 弘毅 准教授（全学教育機構）
中山亜紀子 准教授（全学教育機構）
辻 一成 准教授（教養教育運営機構）
永田 恒久（国際課長・国際マネージャー）
山田佳奈美（国際コーディネーター）

国際交流企画推進室

藤田 清士 教授・室長（文化教育学部・国際交流推進センター）
山田 直子 准教授（国際交流推進センター）
北川 慶子 教授（文化教育学部）
早瀬 博範 教授（文化教育学部）
ラタナーヤカ ピヤダーサ教授（経済学部）
高野 吾朗 准教授（医学部）
萩原 世也 教授（工学系研究科）
辻 一成 准教授（農学部）

学生交流部門

山田 直子 准教授・部門長
 藤田 清士 教授（国際交流推進センター）
 岡島 俊哉 教授（文化教育学部）
 小田 康友 准教授（医学部）
 村松 和弘 教授（工学系研究科）
 上野 大介 講師（農学部）
 古賀 弘毅 准教授（全学教育機構）
 丹羽 順子 准教授（全学教育機構）
 中山亜紀子 准教授（全学教育機構）
 吉川 達 講師（全学教育機構）
 Coleman South 准教授（全学教育機構）

学術研究協力部門

杉山 晃 教授・部門長（工学系研究科）
 藤田 清士 教授（国際交流推進センター）
 山田 直子 准教授（国際交流推進センター）
 熊本 栄一 教授（医学部）
 大渡 啓介 教授（工学系研究科）
 濱 洋一郎 教授（農学部）

地域国際連携室

新井 康平 教授・室長（工学系研究科）
 藤田 清士 教授（国際交流推進センター）
 山田 直子 准教授（国際交流推進センター）
 田中 豊治 教授（文化教育学部）
 山中 賢一 准教授（農学部）

鍋島サテライト

青木 洋介 教授
 熊本 栄一 教授
 高野 吾朗 准教授
 小田 康友 准教授

学術研究協力部 国際課職員

課長	永田 恒久
副課長	吉岡 邦浩
係長	宮原 茂幸
係長	副島加代子
主任	木村 政治
事務員	木下翔太郎
事務補佐員	野口 尊子
事務補佐員	光吉 智美
事務補佐員	針長佑里恵
臨時用務員	王丸 文子
国際アソシエイト	馬娜

平成25年度年報

佐賀大学国際交流推進センター

Center for promotion of International Exchange Saga University

840-8502 佐賀県佐賀市本庄町1 佐賀大学 国際交流推進センター

電話：0982-28-8589

Fax：0952-28-8819

<http://www.irdc.saga-u.ac.jp/>